

用であると認識しなければならぬ。要するに史料を理解すること、その作者が相手とした嘗ての讀者或は讀者層の如く直接的たるべきである。斯る理解が可能であるかに就ては、近頃表現主義の人たちの間に疑惑が起りつゝあるが、余は一二四頁以下にこの疑ひを斥けておいた。なほ個々の史料の殊に特徴たる點、作者に特有な言葉の癖、彼の觀照や見解も、史料の意味を正しく把握するために顧慮すべきである（バウアー三二九頁以下參照）。即ち知識の範圍、史料存立の時代と層との教養水準、此らのものを考に入れるべきことは、史料の信用の判斷（一九一頁參照）に於けると同様である。或る史料の傳承してゐる諸事實を説明するのに、全般的にまた個々の點に就て、他の同時代の諸報告をも援用するのは勿論、結局は此に關係ある一切種類の史料を廣範圍にわたつて參考することになる。例へば一三二二年ウォルムス「宗教平和」議定書の意義の解釋は、全般的にもその個々の決議に就ても、豫備的折衝やその文書、「教皇、皇帝」兩派の論難、論文の議論、教會職員任命の争ひはしまつて以來の時代記者の記述、此らのものから出發するのである。また例へばユリウス・フィッカーは、その書 *Vom Reichsfürstenstande*. 1861 に於て、*Princeps* 「順序に於て第一のもの、首長、元首、などの義」 *Prinz, prince* 此より出づ」なる稱號と中世に於て此を以て表はされる身分との國法上の意義を、古公文書や時代記にある史料を廣く考察し、國家憲法の發達全體と關聯して説明した。更にその簡短なため往々にして明確でないタキツスのゲルマン事情に關する報告も、其他一切の史料により、また同民族の文化發展總體に就て知られてゐる一切の事柄を考慮して説明するのである。而も解釋が此よりも更に廣範圍に互

ることも屢々ある。即ち種々の發展系列にして他のそれによつて解釋されるものも多數で、これ既に前述した所謂比較法を用ゐるわけである。かうして殊に原始的な古い民族の文化状態や發展は、此に匹敵する事情が今日の未開種族にも存してゐるので、この事情に就て知られてゐる所により説明される。また或る國に於ける憲法獲得の鬭争、社會的對立は近隣諸國に於ける此に匹敵する事象により、つまり諸民族の此に匹敵する發展に於て比較法制史、社會學が示す類似の事象によつて精査される。かやうに比較法を用ゐる際決して忘れてならないのは、この場合問題になつてゐるのは多くは類似 (Analogien) 即ち部分的に似てゐるといふ事で、そのまゝ完全に一致してゐるといふ事ではない點である。何故類似に止まるかといへば、人の集群でも個人でも、その發展は互に一樣ではないからである（七五頁及び一二五頁以下參照）。一見自明のこの事實が餘りに無視されすぎてゐる上に、なほ個々の觀察を誤つて一般に通ずるものとしがちな事情が加はつて、非常に重大な影響を及ぼすべき誤斷を下すことにもなる。實にシュペングラーター（六二二頁）はかやうにして最も廣い範圍に類推法を用ゐたが、諸事實を批判的に確認し、以てその用ゐる方を充分に制御しなかつたのである。また影響する所大きい一つの場合に同様の事情が見られるのは、L. H. Morgan の有名な書物 *Ancient society*. 1877 である（この書のドイツ譯の標題は、*Die Urges.* 1891. 2. Aufl. 1908. 譯者 W. Eichhoff u. K. Kautsky）。彼がこの書物で幾つかの原始民族に於ける婚姻形式の觀察から推論したのは、當初は總ての民族が、群を成し放縱な婚姻共同體を形づくつて生活してゐた事、且つ總ての民族が文明向上するにつれ婚姻形式に就て

同様の階序を踏んで来た事、而して此ら形式のうちで『母權』支配の下に成立したものが重きをなし、漸く最後に一夫一婦の形式に到達した事である。この理論たる、社會民主的史觀、經濟學的唯物論（本書四二頁以下参照）の誠に重要な部分を成すものである事は、エンゲルスの諸著やペーベル、Die Frau u. d. Sozialismus から看取できるとほりである。然るに Westermarck の詳しい研究、The hist. of human marriage. 1891 (L. Katscher u. R. Grazer のドイツ譯は一八九三年刊、第二版一九〇二年) は、モルガンの方法上の誤謬と彼の一般的推論の維持し得ないことを立證したのであつた。解釋に關しては特にフェーダー二四七頁以下参照。

第五節 關聯の把握

第一章第三節殊に七八頁以下に論じてある（一〇六頁以下をも参照）やうに、諸事實を發展に關聯させて把握すべきわが史學の職能に従ひ、個々の事項と此をその内に存立させてゐる發展の全體及び一般と、兩者の間に因果關係をつけなければならぬ。其には多數の組織的な手段が必要で、其らは次の諸項で論ずるが、その前に、『客觀的把握』とはいかなる意味であるかに關して若干記しておく。歴史家は客觀的に作業すべしとは常に言はれることで、また主觀的把握は非科學的だと宣告されるが、此らの語句はどういふ意味であるか。その言はうと欲する所は、我々人間の知識にとつてどこでも充され得ないやうな要請を、歴史家は充すべきである或は充し得るといふのではない。そのわけは、感官及び智力關係器官の性質上、絶対に客觀的な、即ち周圍の

客體を直接に把握する認識には、我々の全知識を以てしても到達し得ないからである。其よりも重要なのは、客觀的認識の實際的概念にして總ての學問に適切し、且つ人の智力にとりあらゆる補助手段を用ゐて可能な程度で諸現象の現實に適ふやうな知識を表はすものである。而して斯る客觀性の尺度は、各々の學問が自身のうちに夫々持つてゐるわけである。何となれば、研究者が何を知らうと思つてゐるかといふ質問即ち根本問題によつて條件づけられてゐる學問の資料と補助手段との種類に、右の尺度は依存するからである。かくて各々の學問の内部で客觀的であると稱すべき研究は、その領域で夫々の場合に及び得べき程度の客觀性を獲得してゐるものであり、主觀的と稱すべきは多少ともそこまで達しないものである。ところが歴史の素材と補助手段とは、この點で特別な困難を生じさせる。まづ前者は大部分、自然科学の素材のやうには、直接且つ繼續的に此を知覺することを許さない。何となれば歴史の素材はいふまでもなく人の諸活動から成つてゐるが、この活動にして研究者が直接に眺めるものは、たゞその極めて僅かな殆ど問題にならない範圍に止まり、主としては、半ば口頭及び文字による報告によつてのみ研究者の知る所となり、半ば活動の結果や産物としての遺物から推斷すべきものだからである。第三章第三節では、此ら史料の性質が我々の曇らない認識を種々困難ならしめることを知得したが、批判といふ補助手段で此らの困難をどこまで克服し得るかをも見たし、更に第四節では批判的に選擇、確認した諸事實を、關聯から見て正しい意味で理解（一二四頁以下参照）し且つ利用するには、解釋をいかに行ふかを明らかにした。

そこで最も困難な職能となるのは、關聯を全體として曇りなく把握することである。凡そ我々が歴史に於ける人の活動に對するや、例へば木石に對するが如く關與する所なく且ついは冷淡であるものではない。またこの事は常に最も近い過去の事件、即ちその關心がなほ直接に研究者のある現代まで及んでゐる事件だけにあてはまるわけではない。極めてかけ離れた時代や地域でも、人の本性の同様な結果、我々のと類似の關心が問題となる。財貨、理念、目標にして此を獲たり此に到達したりする事は最も努力のしがひありと我々が考へるものには、我々は不隨意的にどこでも同情をもつてついで行くし、さういふ努力のしがひありと考へるものを庇護する黨派や人物、またさういふものが全盛で榮えてゐる時期を、他の人物や時期よりも善いと不隨意的に思ふものである。この主觀的なひいきとその基礎になつてゐる價值判斷とが歴史認識に及ぼす影響に對しては、學問的意識を以てできるだけ用心しなければならぬ。

まづ第一に明らかにすべきは、『一般的に承認された』、恆同の價值、價值判斷は歴史の現實には存在しない事である。哲學上體系や宗教に現はれる永久價值さへ形式的であり、内容的には民族を異にするにつれ、また同一民族でも時期を異にすれば、いな現代のことから熟知されてゐるやうに、同一時代同一民族の諸共同體でも、相違したりまた往々にして全く正反對になつてゐる。故に自分の評價を直ちにいつでも適切なものと豫想してはならないので、夫々の場合に取扱ふその時代その共同體の史料から、いかなる評價が事實上認められるかを詳しく研究しなければならぬ（この實際的な一例を示してゐるのは、余の前出著書、中世の時代觀照、一九一八年。

パウアー八八頁參照。彼はこの所で、史料批判上及び言語批判上の細かい點を深く調べたものを基礎とし、種々の時代觀照の説明をつける事を、歴史上客觀性の理由づけのため重要な豫備作業であると記してゐる）。この際普遍的な哲學上及び宗教上の價值概念が、考察を發明する役にたち得る。實に個々發展の普遍的結果に對する關係如何、進歩とは何か、歴史の終局目標は何か、此らの問題を觀察する場合には、右の價值概念を參考しなければならぬ。併し此に就て不斷に意識してゐるべき事は、この際哲學は役にたつと思はれる範圍で、たゞ補助學として此を利用するに止まるといふ點である（參照、三二一、五一頁）。

近頃影響著しいリッケルト及びその學派の價值說に對する我々の立場を、此で明らかにした。リッケルトが（二〇五頁參照）歴史科學と自然科學との一つの本質的相違として、前者の價值に關係づけられる點を擧示したことは、いかにもその功績大であるが、價值の決定に於ては彼は層一層抽象的形而上學的概念を抱き、遂には階序ある一個の概念體系を立てた。科學、藝術、宗教、もしくは眞、美、善、また社會倫理的、個人倫理的、個人宗教的な三關係、此らの價值概念は初め彼が此を立て、既に甚だ普遍的に仕組んだものであつたが、右の概念體系では此らの價值概念を極めて巧妙複雑に配置した（其が特に明瞭なのは彼の論文 *Vom System d. Werte*. in: *Logos* 4 (1913) である）。シュプランガーが此に反對して言ふ所誠に適切である、『價值は自由に浮游してゐる存在ではない。リッケルトの概念圖式説は精神の生活構造に適しない』（シュプランガー、*Ricketts System*. in: *Logos* 12 (1923) H. 1 この號はリッケルトに獻ぜられたものである。なほ二〇六頁に擧げ

た著作にあるベッヒャーの批判、また七一頁に挙げた論文にあるカウフマンの批判、竝に F. Böhm, in: Kantstudien 1933 H. 1/2: 1-18 参照)。リッケルトは併しその見解を固持してきた。彼の著書 Die Probleme d. Gesch.-philos. 3. Aufl. 1924. S. 118 には、歴史家には選[○]擇とその上に評價が必要であるといふ點に基づいて、その價值説を支持してゐるが、余はこの推論に反對である。此に就ては第三章第六節に述べた所を参照されたい。B. Croce. Theorie u. Gesch. d. Historiogr. übers. v. E. Pizzo. 1915 S. 98- に見える『選擇』なる概念に對する不明確な立場にも余は反對である。七九頁をも参照されたい。

茲に斷言高調しておかなければならないのは、歴史的認識では絶對的な價值尺度が問題となるのではなく、既述の意味で相對的なそれが重要だといふ事で、此はローレンツが後に挙げる書物で力説した通りである。(フリリング一二九頁以下をも参照)。この相對的價值尺度の助けをかり、廣きに互つて主觀的なひいきや絶對的價值尺度に束縛されざることを得るのである。例へば人あり、熱心なドイツ主義的新教徒で、カトリック教會の歴史を究明すると假定しよう。彼はさういふわけで、ペテロを通して基督の代表者として教皇が超世俗的に任命され、また斯る代表者として教皇が超世俗的な使命を帯びてゐるといふ事を信ぜず、カトリック教會を目して新教徒及び國民の利益の敵とする。併し此らの利益やその基礎になつてゐる絶對的價值判斷から出發して、教皇史の發展を把握することはなからうし、又さうしてはならない。カトリック教會自身の國際的關心と價值判斷とから出發するのである。たとひ研究者は使徒ペテロの使命を信じないにしても、

なほこの使命に對する信仰は、教皇史原動力の根源として承認且つ評價すべく、個々の契機や人物も、この使命から考へてどういふ働きをしたか、またこの使命の目的をどれだけ促進或は阻止したかといふ觀點から考察すべきである。而してどこでもかういふ風にするのである。かうして組織的な補助手段を以てすれば、主觀的把握とは天地の差ある程度の客觀性には、いつでも到達し得る。この差をまざぐと見るには、次の書物でも比較するがよい。即ち一方では A. Bower. Unpartei. Gesch. d. Päpste, 此に對し他方ではレオポルト・ランケの著書 Die röm. Päpste, ihr. Kirche u. ihr Staat im 16. u. 17. Jht, 或はウィルヘルム・ギーゼブレヒトのドイツ皇帝時代史の中にある教皇の政策の敘述、もしくは二〇二頁に挙げた余の書物にある教皇の世界支配觀念の概説である。此らのうち最初ものは、第十八世紀の中頃大に愛讀されたが、その標題は今日我々にはこの本自體への皮肉のやうに思はれさうである。なほ次に論ずる把握の種々の機能のところ、組織的な取扱い方法を詳示する。

参照、前出ローレンツ、史學の主要傾向及び機能、一八八六年七〇頁以下、リッケルト、Kulturwiss. u. Naturwiss. 1899. 6-7. Aufl. 1926 同、自然科學的概念構成の限界、一八九六一九〇二年、第五版一九二九年、これはウインデルバンド、Gesch. u. Naturwiss. Rektoratsrede Strassburg 1894 に關聯してである。なほ参照、ウインデルバンド、哲學楷梯、一九一四年、二四四頁以下、B. Schneider. Üb. Begriffsbildg u. Werturteil in d. Gesch. in: Annalen d. Naturphilos. 3 (1903) A. Grotenfelt. Geschichtl. Wertmassstäbe in d. Gesch.-philos., bei

Historikern u. im Volksbewusstsein. 1905 余の教本七四九頁以下、ベッヒャー、精神科學と自然科學、一九二一年。上記七〇、八二、一二八頁の文献をも参照。

一、個々の事實の連結 (Verknüpfung) 一つの發展系列の肢節として一緒になる事項は、我が此を見出して互に結合し、いはゞ孤立した諸點から此らを結ぶ線を引かなければならない。併し其を勝手氣儘に行ふこと、詩人が想像の結合に耽るやうであつてはならない。與へられてゐる確實な史料事項に嚴に倚頼すべきである。また其ら史料事項の間に因果的結合を作らうと試みるには、人の行爲は一般的に類似してゐるといふ點による推論だけでなく、其ら事項をその内部に存立させてゐる諸事象、状態の特別な條件に従ふ推論にもよるべきである。此をできるだけ簡單な一例に就て説明するならば、次のやうな事項でも與へられてゐるとする。或る中世の國王が二月六日には Würzburg に、二月九日には Nürnberg にゐた。さうすれば此らの事項を連結して、その國王はその間に前の所から後の所へ旅行し (此は一般的類推から推す)、且つ最短の道をとつたと推論する (後の點は中世運輸事情の特別な諸條件から推す、その理由は、當時此だけの道程を行くには、少くとも三日を要したからである)。かやうに簡單な連結には、その方の全く僅かな才能しか要しないこと、見られるとほりである。茲に連結の才能とは、諸事項をかういふ方針で結合しようとか、適切な類推を見出し、此を利用して推論に成功しようとかいふ事を思ひつく能力をいふ。材料が一層豊富、複雑な場合には、斯る能力を愈々多く必要とする。即ち或る獨創的觀照 (直覺) を要するわけで、この能力はそれ自體殆ど習得しえないもので、想像力な

くしては生成せず、而して總ての學問に於けるが如く、茲でも研究の進路を示すものである。併しその際、著眼した連結が實際に一連の關聯を成し、與へられた諸事實總てが無理なくその關聯の中へ容れられてゐるか、應用した類推法は實際適切であるか、推斷は首肯するにたるか、此らの點は不斷細心に注意し且つ監査しなければならぬ。此らの要求は、表現主義的傾向では甚だしく輕んじてゐるものである (参照、五七頁以下、一二五、一九九、二〇九頁)。然らば何故右の如く種々注意する必要があるかといふに、連結の觀念は本來一個の假説であるからで、他の學問に於けると同様、與へられてゐる諸事實によつてその信用や正否を檢證しなければならぬわけである。而して連結が漸く蓋然の程度にしか達しないことも稀ではなからう。事項が充分稠密に與へられてゐないため、一つだけの結合が許されない場合には、殊にさういふことになり易い。例へば前に挙げた例で、兩時點が一層離れてゐるとした場合の如きである。されば夫々の場合に達し得べき確實さの程度は、不斷ごく明確に此を知り、可能と思はれる幾つかの連結のうち、前示の諸要求に適ふものを結局採るか、さうでなければ判断を下さずにおかなければならない (参照、フェーダー一〇七頁以下、二七五頁以下)。

素材、時代及び場所によつて材料を整頓する事 (一九五頁参照) は、連結の職能の豫備作業であつて、この職能に自然な基礎を供するものである。何となれば幾つかの歴史的事項が同じ一連の因果關係に屬するか否かは、實に時の順序、場所的共在、その時々々の主題によつて條件づけられる事であるが、素材の整頓にあつては殊にその選擇が、夫々の場合の主題によつて條件づけら

れるからである（参照、七九、二〇三頁及び第三章第六節）。

而も幾つかの事實が或る發展複合に因果關係上所屬してゐるといふ事は、其ら事實の時間的及び場所的共在から無條件に生ずるわけではない。何となれば相互に因果的に結合してゐない諸事實が、外見上集り合つてゐることも往々あるからである。故に特に檢證しなければならぬのは、相次いで起つてゐる幾つかの事件もしくは同一舞臺で起つてゐる幾つかの事件が、實際內的に結合されてゐるのか否かの點である（八〇頁参照）。他面直接右の外面的關聯のうちに出て來ない事象にも、注目しなければならぬ。舞臺や時代を異にして起つた事象が、互に結合してゐることもあるからである。連結に際し史眼遠大で深達するのは、例へばランケの如き大歴史家の殊に特色とする所である。併し其には、二〇七頁にその特徴を述べた監査も必要なものである。

二、諸事實をその關聯に纏めて再現すること、即ち與へられてゐる事項に基づき、嘗ての事件の経過を再び明らかに思ひ浮べる内的表象は、直接に連結と混和してゐて、たゞ方法論上の考察に於てのみ此と分離し得るものである。まづ總ての事實の表象に於けると同様、再現には想像を必要とするが、この想像は連結にあつての如く、與へられてゐる事項から少しも離れてはならないし、本筋を外れてゐる副表象は意識的に總て斥くべきである。詩人は意味深い關聯を作出するに必要な補充表象を（例へば或る人物の性格が統一あるものとの意味で傳記的事項を把握する際）、一般的な心理的契機から採り出すだけであるが、歴史家はさうしてはならない。問題にしてゐる事象の細かい點を精密に知つてゐて、當該時代とその全環境との特殊な氣分のうちへ自分

自身を移すべきで、さうして事象をその諸條件から出發して明らかに思ひ浮べるわけである。歴史家が自分の表象のうちへ採り入れ、關聯の表現のうちへ入れこむ個々の特性は、何れも史料證據から汲みとるべきである。何事でも、美的或は倫理的見地から假作して入れたり、直覺的に推論したり、甚だしきに至つては素材全體を、象徴化する表現の爲の材料と見てそのやうに取扱つたりしてはならない（参照、五四頁以下、また其所に説いた見解の反駁に就て一二四頁及び本章第四節末段）。従つて藝術家的再現は、科學的再現とは極めて本質的に相違する。歴史の研究や敘述は、この科學的再現を用ゐることによつて藝術にはならず（本章第六節参照）、また認識を提示しようとするその科學的職能と、其によつてどこでも要求される作業の仕方とにあくまで忠實である限り、藝術にはなり得ない。また再現は個人と「單一」事象との把握にあつてのみ用ゐられ、集團現象は自然事象のやうに外的觀察によつてのみ認識されるから、歴史は後者を取扱ふ限りに於てのみ本來の科學であると考へるのも誤りである。集團現象と雖も人の活動である以上、始終精神的な個々の事象に基づくものであるから、此を意味深い統一的關聯に纏めて把握する事が、再現なくして不可能なのは個々の事象と同様である。この點に就ては既に七四頁以下に示す所があつたし、また次の項でも一層特別に論じなければならぬであらう。

三、諸因子の把握。歴史上活動關聯の再現に役だつ要素は、精神的、自然的、文化的の三つに分たれる。併し此らのものが或は促進的に或は阻止的に、たえず互に共同して働き、密接な因果結合を成してゐる事は強調しておかなければならない。而してこの際誤認してはならないのは、

此らの因子總てが變化なく同等のまゝである勢力として活動するものではなく、時代が進み場所が變れば此ら因子も變化するから、歴史上事件の産物であると同時にその因子でもあるといふ事で、この點は下記文化要素の所で特に明らかに見るとほりである。

い、精神の因子の把握。人の諸活動がわが史學の對象を成すのであるが、此ら活動は本質的には精神的な諸原因に基づく（七四頁以下参照）から、歴史上事象の因果關聯を認識するのに、此ら原因は至大の意義を有する。而して精神的な原因や條件を洞察するには、まづ我々自身の精神生活の經驗による類推から出發する（一二四頁、一九七頁以下）。併し日常生活に於て他人に公正であるためには、自分のことから推して他人の動機を偏頗に結論してはならないやうに、歴史家も自分の個人的經驗だけに頼つてはならない。できるだけ多方面且つ詳細な一般的人間認識を有すべきで、この認識は詩文や歴史自身の領域に於ける讀書により、また多様な人間の性格形成、觀照、動機の研究により（參照 Jb. d. Charakterol. 1 (1924) - Z. f. Menschenkunde Jg. 1 (1925) シュプランガー、Lebensformen. 4. Aufl. 1924）、自己直接の經驗の範圍を越えて擴大されるものである（一九七頁以下参照）。また人の精神生活の暗黒面も無視してはならない。暗黒面とは、異常な状態や性癖にして精神障礙の域に入るものである。實に心理學と精神病との知識は、どの點でも歴史家の助けになるであらう。今から久しい以前に學問的に創められた手蹟學（Graphologie）も、手蹟からその書き手の性格などへ親しい逆推を行ふから、この場合には從來よりも一層これを顧慮すべきである（參照 G. Schneidmühl. Handschr. u. Charakter.

1911. 2. Aufl. 1929 クラーゲスの同標題の書、一九一七年、第一四一一五版一九三二年。叢書 Wiss. u. Bildg. Nr. 285 に同著者の『手蹟學』あり、文字例の圖解八一個を附す。雜誌、Mithn d. Dt. grapholog. Studienges. 1927- 月刊。なほ M. Becker. Graphol. d. Kinderschr. 1926

併し現在の立場からの實際的及び理論的個人心理學に通じてゐても、其だけでは充分でない。精神作用の過程はその根本要素では全く一致してゐるが、其でもなほ、既に度々説かなければならなかつたやうに、人の知、情、意の作用の仕方やその表白形式は、時代と人の集群とを異にすれば同一ではない。また人の相互の諸關係、個人がその存立する社會的共同體に對する、また後者の個人に對する作用、反作用は、個々の生活の心理學によつては認識し盡さるべくもない諸現象を生ぜしめる。此ら總ての場合に必要な洞察は、時々の經驗上の觀察から此を獲るのでは不十分に止まる。文化史や土俗誌からならば既に此を一層よく獲ることができ、右の洞察は甚だ特有且つ多方面なため、特別な一研究領域たる社會心理學の對象を成してゐる。而して社會心理學的考察法の重要なことは、いかに強調しても過度でないといつてもよい。何となればこの考察法は、まだ一般に且つ充分意識しては應用されてゐないからである。昔は人々が我々とは違ふ衣服を著けたといふ事は誰でも理解してゐるが、人々が昔は今と違ふ觀照や感情をもつてゐたといふ事は、昔の人たちの行動や状態を正しく把握するに必要な程度に力強くは、必ずしも常に明らかにされてゐない。故にあらゆる點に於て、時代、種々の民族、民族圈相互、この三者夫

夫の間の相違を把握し、此を考慮に入れるべきである。而もうはべだけ且つ大體の考へによるのでなく、徹底的の研究に基づく要がある。而してこの研究は、語義の變遷といふやうな細かい點に至るまで、精神的環境全體に擴がるものである。例へば教皇グレゴリー七世が一〇八〇年に國王ヘンリー四世を、第一にはその『増上慢 (superbia)』の故に王位から逐つた、この事をいかに理解すべきか。我々今日の見方によれば、増上慢はいかにも賞讃に値ひしない性格上の一特徴ではあるが、まじめに右のやうな行動に出る理由にはなり得ないものであるのに、その増上慢の故にはどういふ事であるか。此を理解するため知らなければならないのは、アウグスチヌス及びグレゴリー大教皇によつて特色づけられてゐる中世の見方である。此によれば『増上慢』は惡魔の原罪、世襲罪であり、また神とその法とに逆らひ叛く惡魔の徒黨即ち『暴君』の最も偽り難いしるしであるかと考へられてゐる。而して『暴君』は基督教當局の敵で、神と人との前に永劫の罰を受けるものとされてゐる。當時誰でも、特にグレゴリーが明らかに熟知してゐたこの見方から、『増上慢』といふ標語と、グレゴリーの處置とを理解すべきである。それ故この理解のためには、右の標語などの出て来る觀照圈全體を會得してしまつてゐなければならぬ(參照、この點に就てもまた一般的にも余の書物、中世の時代觀照、第一部、一九一八年。また余の下にゐる學生たちの稱號論文に多數の個別研究がある。なほバウアー八七頁以下に、右の根本的に重要な要求がなほまだく忽かせにされてゐる大勢を、適切に擧げてゐる)。此はどこでも同じことである。だから顯著だとか特異だとか思はれる個々の或る現象に就て、此をその時代や圈内から出發して

いかに説明すべきかを追究させられることになるだけでなく、いはゞ或る外國語に通ずるやうに、我々の取扱ふ時期なり人の集群なりの精神を熟知するには、概してまた前以てその精神の内へ我自身を移すわけである。

七三頁以下に説いたことであるが、或る傾向の代表者たちが社會心理學的考察法の重要さを強調するのは正しいが、個人の一切の行爲、思惟、感情を社會心理的要素の非獨立的機能なりと主張するに至つては、偏頗な考で行きすぎてゐる。故に我々は理由を示して此を斥けたわけである。一方から見れば個人が比較的に獨立してゐるし、他方から見れば共同體が比較的に強力だといふ事情であつてみれば、行はれつゝある相互作用の多方面、多様な動因を究明し、個人の性質、業績のうちで、何が特殊であるか、何が個人の屬する時代と共同體との共同財産であるかを説くところ、社會心理學的の最も重要な職能の一つである。この際問題になるのは、天才のその周圍に對する關係ばかりでは決してない。實はこの關係を重視しすぎることが屢々なのであるが、常人の諸關係も同等に問題となる。また問題になるのは、或る不定の集團の一般概念ではなく、誠に種々に限定されてゐる多様な個々の集群であることは、近頃『類型論』といふ名稱で専門的に論ぜられてゐるとほりである(參照、本書七一頁に擧げたカウフマンの論文七一—〇九頁、バウアー一〇一頁以下)。家、種族、國家、多様な組合、團體、又は其他の社會的集群の内部に於ける個人が、精神的に從屬或は獨立してゐる程度は非常に相違する。その時々現在のでもさうであるし、時代や民族を異にすれば一層大きな相違がある。普遍的な一個の公式又は離れ々々の例に

よつてこの點が簡單に解決され得るものではなく、詳細な研究を要するわけである。

社會心理學的考察法は、近代の史觀が深遠となつた際に始まり、特に文化史の領域で應用される機會があつたものであるが、その體系を成すに至つたのは、一面ヘーゲルに、他面コントによる。前者は（四九頁以下参照）民族精神の概念を明示し、『各人はその時代の兒である』といふ有名な言葉を出してゐる。後者は（四四頁以下参照）『環境』といふ概念を創り出し、比較法に基づいて文明の進行に伴ふ思惟方法の變遷を分析した。また M. Lazarus 及び H. Steinthal は一八六〇年に彼らの創刊した *Z. f. Völkerpsychol. u. Sprachwiss.*（一八九一年から *Z. d. Ver. f. Volkskde.* hrsg. v. F. Böhm として續刊）に於て、その研究領域にこの民族心理學といふ名稱を與へ、A. E. F. Schäffle, Bau u. Leben d. sozialen Körpers, 1875. Bd 1 は『社會心理學』といふ名稱を造り、この領域の職能を概説してゐるが、右の名稱はその後益々優勢になつた。社會心理學の範圍、限界に關する見解、特に社會學、歴史哲學、人種學、民族心理學、民族誌との關係から見ればどうであるか、此らに就てはまだ議論がある（参照、R. Knippen, Grundsätzl. Umschreibg d. Begriffes d. Volkskde. in: *Vjschr. f. wissenschaftl. Pädagogik* Jg 8 (1932): 386-400 H. 4 エー・ン・マイヤー、Goethe, Freiherr von Stein u. d. dt. Volkskde. in: *Mitth. d. Dt. Akad.* 1926 Nr 4: 129- bes. 142- また Atlas d. dt. Volkskde は一九二八年から著手されてゐるが、此に關しては、右ドイツ學士院報、一九三〇年第二號七三頁以下のヘームの論文、またカイザー一九一頁以下。雑誌には右記ヘーム編輯のドイツ民族學會雜誌。更に

G. Schreiber, Nationale u. int. Volkskde. 1930 (Forschgn z. Volkskde H. 4-5) 何れにせよこの學問の職能として承認しなければならぬだらうと思はれるのは、社會精神的諸要素の普遍的形式及び條件、竝に歴史の經過中に其ら要素が種々特殊、具象的に現はれる點を取扱ふ事である。シメンメルは社會的集群の諸要素と個人の其らのものに對する關係とを、次の論文其他で分析してゐる、Üb. soziale Differenzierg. in: Staats- u. sozialwissenschaftl. Forschgn 10 (1891) H. 1 同様ニ T. Kistakowski, Ges. u. Einzelwesen. 1899 ノース、Historik. 1912. Bd 1: 95- T. Litt, Individuum u. Ges. 1919 K. Breytig, Vom geschichtl. Werden. Bd 1: Persönlich-kt u. Entwickl. 1925 及びランパンユト、Was ist Kulturgesch. ? in: Dt. Z. f. Gesch.-wiss. 1 (1896-97) H. 2 Ders. Moderne Geschichtswiss. 1905 彼は種々の論著特に右のもので、本書四七頁以下にその特徴を示した傾向に片寄つてではあるが、歴史考察に對する社會精神的要素の意義を説いてゐる。ペーロッパ、Griech. Gesch. Bd. 1, 2, neugest. Aufl. Abt. I, 1912 の緒言にも其がある（此に就て参照、ハイヤー、Die Bedeutg d. Persönlichkt in d. Gesch. [usw.] Diss. Greifswald 1914）。文献や種々の見解の概觀の見られるのは、L. Stein. Die soziale Frage im Lichte d. Philos. 4. Aufl. 1923 バウアー五三頁以下、二二六頁以下、ハルト、社會學としての歴史の哲學、第一部、第三、四版一九二二年、J. Goldfriedrich. Die histor. Ideenlehre in Dtl. 1902 余の教本六五〇頁以下。新しい文献を連載するのは、R. de synthèse histor. 1900-30 Krit. Blr f. d. gesamten Sozialwissn. 1905- Z. f. Völkerpsychol. u. Soziol. hrsg.

v. R. Thurnwald. 1925- この題目に就て最も廣汎に敘述してゐるのは、ヴァント、Völkerpsychol. chol. 10 Bd. 1905-20. z. T. 2. u. 3. Aufl. 同著者の一卷も『Elemente d. Völkerpsychol. 1912〔附註八〕

ろ、自然的(物質的)諸因子の把握。人の活動の認識には、外的諸原因だけを見れば、精神的反應、衝動は顧みないでも充分であるといふ見解は、我々の斷然排する所ではあるが(七三頁以下、七六頁参照)、物質的諸要素の甚だ重要なことを看過するわけではない。個人、社會的集群、民族、人種の體質、人の行藏に對する外部自然の諸影響は、歴史上の關聯を把握する際、どこでも且つ深く考に入れるべきである。此ら領域は近頃固有の科學的處理を経て特殊専門學科となつた。此ら學科は歴史の重要な補助學として役にたつものである。而してかういふ風に發達したものは、一方では人類學、他方では地理學である。その發達の有様を見るに、前者は殊に人種成立の問題、生物學上の遺傳説と關聯して人種衛生學及び系譜學(九七頁参照)、人種の民族性に對する關係、民族生活に於ける人種の類型的特質、作用、此らの事項を對象として徹底的研究を行つた(人種生物學及び社會生物學、政治人類學)。また地理學は、自然環境の人の活動に及ぼす作用と此に對する人の反作用とに體系的取扱ひを施した(人類地理學、文化地理學、表現地理學、一〇一頁参照)。この雙方の領域はどちらも、近頃歴史の最も本質的な因子であると唱へられた。即ち人種に就ては特に Hans F. K. Günther(次の細字の所に出づ)が殊に國民の成立と本質に關して、また地理學に就ては特にバンゼ(一〇一頁)が、夫々かく主張したのである。實に此ら

要素を深く顧慮すれば、歴史上關聯の把握を深遠廣大とすること非常なものがあるが、事件や状態の説明のため右の顧慮を應用しようとして偏頗に流れれば、此ら要素を考に入れたことが把握を淺薄にすることになる。新しい生物學上の研究さへ、動植物の進化に於て、特發的に現はれて從來機械論的に説明できない變異を是認するやうになつたとすれば、其だけになほさら人の發展に於ける特發性を除かうと思つてはならない。人は精神的物質的存在であり、その精神的素質には、内的感受性或は感受さやその最高形式たる意識といふ根本事實があつて、此ら素質は物質的要素に比べて割合に獨立的な要素である。従つて外から作用する影響は直接且つ受動的に、寫眞乾板か鏡によるが如くに寫されるものではなく、内部に採り入れられ、生きてゐる精神的要素によつて消化される。此ら生命ある精神的要素を普通に精神と名づけるのである。故に同様な自然條件も、此に會する人やその集群の素質や氣分が違へば、極めて種々様な作用を生ずる。自然條件から出發して人やその集群の行動を普遍的に推論しても、その推論は、個々の場合には常に條件つきで應用され得るに止まる(七四頁以下、一九九頁参照)。

概觀のため参照すべきは、L. Schemann. Die Rasse in d. Geisteswissn. 3 Bd. 1928-31. bes. Bd 3: Die Rassenfrage im Schr.-tum d. Neuzt. F. Hertz. Moderne Rassen-theorien. 3. Aufl.: Kultur u. Rasse. 1924 ハンヌ・キルナー、Kleine Rassenkunde Europas. 1925 Ders. Rassenkunde d. dt. Volkes. 16. Aufl. 1933 月刊誌 Volk u. Rasse. hrsg. v. B. Schultz, 1926-; v. d. Reichsausschuss f. Volksgesundheitsdienst, Jul. 1933- Zbl. f. Anthropol. 1886-

Arch. f. Rassen- u. Ges.-biol. 1904- E. Bauer, u. a. Grundriss d. menschl. Erblich-
 ktslehre u. Rassenhygiene. 2 Bd. 3. Aufl. 1927, 31 H. E. Ziegler. Die Vererbungslehre
 in d. Soziol. 1918 ヲキナトノ Polit. Anthropol. 1903 及び Polit.-Anthropolog. Revue.
 1902-ラキナノ Völkerkde. 2 Bd. 2. Aufl. 1894, 95 Illustrierte Völkerkde. hrsg. v. G.
 Buschan. 2 Bd. 3. Aufl. 1922, 23 ラキナノ Anthropo-Geogr. od. Grundzüge d. Anwendg
 d. Erdkde auf d. Gesch. 3. Aufl. 1909, 12 前田シノノの書第三卷(一八七八年)一一二頁以
 下、なほ一〇一頁参照。〔附註九〕

は、文化因子の把握。歴史の進むうちに人の活動によつて創られる成果や状態は、いかにもそ
 れ自身歴史事件の産物ではあるが、夫々の場合に我々が注意する事件複合にあつては、既に興へ
 られてゐる因子のやうに作用する。その理由は、人類の太初を除き、歴史上の現象で何らかの既
 存文化によつて条件づけられなかつたものはないからである。其ら成果、状態の一部分は、社會
 精神的及び物質的諸要素と結合して離るべからざるものになつてゐるが、また他の一部分は其だ
 けが固有の大きさのものとして現はれてゐる。その時々々に現存する科學、藝術、技術、宗教、國體、
 教育法などはそれである。此らのものは固有の大きさのものとして總て客觀的に考察し得る。而
 して此ら固有の大きさのものは、確定的に與へられた總和といふ形で各世代に傳へられるのであ
 る。斯るものの影響を體系的に顧慮することは、歴史の文化的、發展的考察法の現はれたのと
 共に漸く始まつたのであるが、その後此らの影響を過大視、誇張して偏頗に陥つたことも屢々な

のは、社會精神的及び物質的影響に於けると似てゐる。併し文化要素が作用するやうになるには、
 まづ個人や共同體が此を採り入れ、消化して自分のものにしてしまはなければならぬし、且つ
 當該文化領域の特性により、また個人や共同體がその時におかれる特殊の事情により、並に時代
 の相違により、更に同時代でも場合によつて、右の過程の進行する限界、程度は千差萬別窮まり
 ない。此らの事情を、只今述べたやうな偏重に陥る代りに重視すべきである。國體や憲法が例へ
 ば或る國民に及ぼす影響は、文學や藝術のそれよりは一般に一層均等である。後者は教養ある階
 級に及ぶだけで、且つ此ら階級のうちでも個人に及ぶ影響は、その關心や理解力の程度によつて
 夫々また甚だ不同である。割合に均等な憲法の影響にも、その及ぶところの人民層が異なれば、
 夫々の社會的、政治的事情につれて誠に多様な程度に大小がある。此に就ては、古代東方の專制
 國と現代の民主國とで、公的生活への國民關與の形がいかにかに相違するかを思ひ浮べさへすればよ
 い。低い文化階段では、總ての個人の文化要素への關與從つて其ら要素の作用は、全體として高
 い文化階段に於けるよりも一様である。高い文化階段ではその作用の分化は益々著しくなる。而
 して文明が或る高度に達すれば、文化財への總ての人々の關與を一層均等にしようとする努力が、
 再び強くなつてくる。

若干の傾向から出發し行はれてゐるやうに、文化事情の個々の要素を歴史生活の支配的因子と
 認めることは、全體としての文化事情をさう認めるよりも更によろしくない。經濟學的唯物論
 (四二頁)の代表者たちが、生産關係を歴史の根本原因なりと唱へ、或はバックル(四六頁)が人

の一切の進歩を科學に歸し、また自然科學、工學の代表者たちが、發達といへば何でもこれら領域の業績に依存するとなし、人の歴史は機械器具改良の歴史であると言つてゐるが如き、總てこれである。斯る偏見の存するのは、いふまでもなく特に表現主義的傾向(六一頁)に於てである。この傾向の代表者シュペンゲラーは、その小冊子 *Denn der Mensch ist ein Raubtier*. 1931 に於て、歴史經過に於ける肉食獸的暴力支配といふ意味での技術上優越の根本要素は、人の手であると唱へるところまで行つてゐる。實に極めて様々な關心領域、部分的には個々の専門領域から、何かの個々の事物が一切の文化發展、一切の國民性を決定する要素だと主張されてゐる。此は既に人種に關しては二一六頁で、また景觀に關しては一〇一頁で見た事であるが、なほ二三の例を擧げておく。Georg Schmidt-Rohr は、他の文化要素を若干吟味してゐるに拘らず、『民族は言語の力から生成した統一ある心魂の共同體であり、而してこの共同體はその成員を一定の特性に押し込めるものである』と稱してゐる(この説のあるのは彼の著 *Die Sprache als Bildnerin d. Volkes*. 1932 その第二版の標題は *Mutter Sprache: vom Amt d. Sprache bei d. Volk-bildg.* 1933 この書を著者自身は『言語の從來の解釋をコペルニクス的に轉回させたもの』と稱してゐる)。また E. Diesel. *Die Neugestaltg. d. Welt*. 1932 は、畏敬の概念を運命の場、文化の中心なりとし、而して文化は機械の闖入によつて技術の沼地となつたが、この沼地を改造、克服しなければならぬとする。また G. Dittmer. *Magie, Mutter aller Kultur*. 1930 なる書物は、此ら偏見の諸例と繋がりがあることを、既にその標題によつて充分に表はしてゐる。な

は Sigmund Freud はその著 *Der Unbehagen in d. Kultur*. 1930 に於て、この不快は人の自然の本能特に性慾が文化によつて抑壓されることに對する知覺上の反動だと説いてゐる。而してこの反動たるや、死を憧憬さすまでに昂進する。よつてこの反動と性慾的なものとの闘争が、文化過程全體を特徴づけるのだと言つてゐる(フロイドの説の要點を知つてゐる人には、驚くにたらない事である)。更に五六及び一〇九頁にその書物を擧げ、余は彼の見解を排すると言ひそへておいたフリーデルは、疾病を以て近代に入るにつき決定的なものと説くだけでなく、次のやうに言ふ所まで行つてゐる。『新しいものが形成される場合にはどこでも、虚弱、疾病、頽廢が在る。生育してゆくものは總て頽廢的で、春には自然全體に若干神經衰弱的なものが有る。健康とは新陳代謝機能が罹病してゐることである。』また『疾病が生産的な或るものである事、この一見逆説的な解釋を我々の研究の先頭におくべきである。』かうして彼は諸事實を勝手に取扱ふに當り、この根本見解を遂行するのであるが、その取扱ひの特徴は五六頁以下特に六二頁に述べた。斯る諸見解の原理的出發點が、相互にもまた各自内部でも矛盾してゐる事を思ひ浮べ、且つ發展に作用する諸原因を詳しく先入見なしに分解すれば、此ら見解の偏頗なことはたやすく明らかになる。

多様な文化要素を體系ある組織にして説明してゐるのは、*モーリス*、*Die Kulturgesch.-schreibg, ihre Entwicklg. u. ihr Problem*. 1878. S. 115- J. J. Honegger. *Katechismus d. Kulturgesch.* 3. Aufl. v. R. Eisler. 1905 詳しく特徴を述べてゐるのは、*シムフレ*、*社會體の*

構造及び生活、一八七八年、第三、四卷。ロツツェ、小宇宙、第二卷第二篇第六章の第三、四にもある。『民族誌』も部分的には茲へ入つて来る。二一四頁以下、特に同所に挙げたカイザー一九一頁以下に論じてある文献をも見られたい。なほ本書七五頁以下、一一三頁以下、一六〇頁、一九七頁以下参照。

第六節 敘述

茲では敘述を、たゞ歴史作業の手段としてのみ、即ち研究の諸結果を目的にふさはしく表白する手段として、考察するに止まり（二八頁以下の編史に關する文献記載参照）、敘述の賦形には關はらない。こののちの點は美學もしくは文體論の一般的領域に屬するものである。多くの人々が主張するやうに、藝術家的賦形、藝術作品たる敘述の創作が、歴史家の排他的に専念すべき、或は本來の、職能であり、従つて一切の研究は、いはゞ畫家のスタヂオでの習作やスケッチと等しく、單に右のやうな藝術品を作る準備として役だつただけがその目的だといつたものではない。實に總ての學問に於けるが如く、研究は認識獲得のための自己目的であり、敘述には第一に、どこでもさうであるやうに、認識をまげずに再現すべき職能がある。形式に於て完成した藝術作品が生じてもすれば、其は直接の學問上の職能を超越した附けたりの長所である。而してこの職能を果すには、組織的研究の前述の要求總てが適用されなければならない。問題になつてゐるのが、史料批判的研究やその種の準備作業の説明だけでなく、大なり小なりの關聯範圍で事件や状態を再現することである限り、研究結果を認識に従ひ再現することは、元來、特殊な諸問題を提供するものである。

或る歴史的題材を報告しようと思ふ研究者は、そのために必要な精神的過程に關しては、どの報告者（一三四頁以下）とも同じやうにその題材に對立するわけである。故に報告者は、報告に會しては、精神的過程がその眞實さを害はなかつたかを批判的に注意しなければならぬやうに、自分自身を制御して、作業に際しさういふ事が自分に起らないやうにもすべきである。この事は就中、研究によつて獲た材料を縮める手續にあてはまる。抑々研究者の自由になる詳しい事柄總てを敘述に採り入れることは、殆どいつでも不可能である。何となればさうすると、事件の経過の明らかな觀念を與へ得ないだらうからである。併し短縮化は、いま縮めつゝあると意識しながら行はるべく、その際主要な内容はやはり保存されること、いはゞピアノ用拔萃曲によつて、管絃樂曲の相關聯する音の内容が本質的には再現されるが如くでなければならぬ。而して各々の場合主要なものを選択は、主題によつて決定される。即ち主題が示す發展系列の關聯にとつて缺くべからざるもの、もしくは重要なものを見出し（參照、七九頁以下、二〇三、二〇七頁）、一様な詳しさで此を再現すべきであり、右の關聯にとつてそれほど重要でないものは、それ自身かに興味があらうとも一層強く短縮すべく、またこの關聯に屬しないものは總て採らずにおくべきである。かういふ風にするにはどうしたらよいか、此は普遍的な規則によつて習ふことはできない。併しその方法は、我々が日常生活に於て或る事象を物語ることに實際に働かしてゐる精神活

動なのである。またこの活動は練習によつて完成されなければならない。そのためには學校で教授の際、既に作文が役にたつこと勿論である。而して材料の排列がこの職能を助けるやうにしなければならぬ。廣大な關聯を敘述すべき場合には殊に、材料の整頓により、重要な事柄が眼について、その意義が認識され得るやうにすべきである。例へば傳記を作る時には、主人公の思想、行爲、體驗を日記のやうにその日その日記入するよりは、割合に長い年月の區切りの中で、當該人物の種々の最重要な活動や生活圈に従つて敘説を事項別とし、また全生活に互る多くの事柄は、此を一團とし、或は何かの引つかゝりのある所で纏めるなどする事にならう。普遍妥當の規則は、排列に就ても與へられ得ない。此ら規則を目的に適ふやうに應用することは、習練と熟慮とにまつものである。序でながら、既に學校の作文教授に於ても、屢々行はれるやうに排列を外から課すべき形式とは考へず、排列とは主題が何であるかにより、其から內的に夫々の場合の目的に適ふ性質をもつて生じてくる整頓法だと考ふべきである（フリング一五五頁以下、バウアー三四一頁以下）。敘述にはもう一つ補助手段がある。此は意識して制御しながら應用し、以て研究結果の適切な再現が害はれないやうにすべきものである。即ち多數の事實を少數個別の又は唯一の事實によつて代表さすこと、これである。而して此ら代表事實は、かの事實總てを報告したと假定した場合と、本質的に同一の洞察、觀照をなさしめるに適するものである。思惟、會話の領域全體でたえず用ゐてゐるやり方は、即ち右の方法で、例へば概念の形成にあつてもこのやり方で、個々の特徴を抜き出すことによつて或る對象を言ひ表はすことになるのである。概念が正しく形

成されるのは、特徴が眞に把握された場合だけなのと同様に、個々の『代表的』事實や語句による多數事實の再現が適切であるか否かは、其ら代表的事實などが眞に特徴をなし、類型的なものであるか否かに依存する。この際重要なのがどういふ點であるかは、右の條件に背いて過つことが屢々あり、而も政黨間では其が故意に行はれることも随分度々あるのを思ひ浮べれば、最もよく明らかにし得る。即ち政黨の間では、例へば或る階級又は黨派の一員の犯した道徳上の過失を摘發すると、この過失が直ちに當該階級又は黨派の道徳的素質全體を表はすものであるかのやうに主張する類ひの事がある。歴史家こそさういふ風にしてはならない。歴史家が一個の事件を右のやうな普遍的特徴づけに利用する場合には、充分多數、適當な事實の知識から、右の代表的一個の事實で、當該階級或は黨派の品性全體を適切に再現し得るとの確信がなければならぬ。實にどこでもかういふ風にするのである。かうして使へば、代表法は敘述を直觀的に、くつきりと形づくるのに、大切な技法となり得る。何となればこの方法によれば、弱々しい普遍的概念の代りに、判斷、特徴、烈しい個々の事象にして類型的なりと認識され、且つ材料のうちから選び出されるものを、擧げ得るからである。傑出した史家の誰に就て見ても、この例を見出すことができる。歴史教授に於ても近頃はこの敘述方法が應用されること多く、此は敘述を直觀的ならしめる利益があるが、上述の諸條件を必ずしも常に守つてはゐないため、小説的なものに墮することがある。個々の事實が傳來してゐない太古史や原始時代のやうな領域に、この敘述法を行はうと思ふならば、次の著作が近頃の教育學（八四頁）の傾向如何を例示するのに見事に成功してゐる、

Gesch.-unterricht im neuen Geiste. hrsg. v. Bremischen Lehrerver. Langensalza 1923-35. 6. Tl. Tl. 2: Urgesch. u. german. Frühgesch. 1924 上級学校の教授に於ては、ぢかに直觀的ならしめる爲にも、好んで重要な或は特徴ある史料文書を示す風が時折ある。併し學校で史料研究を行ひ、或は甚だしいのは生徒が種々の史料から、一纏まりの敘述の諸部分を作つて出すべきだといふのならば、極端に走つたこととして斷然斥くべきであらう。實にさういふ事は、本來の研究の領域に食ひこむものである（參照、E. Wilmanns. Die Quelle im Gesch.-unterricht. Lpz. 1932 (Der neue Gesch.-unterricht Bd 6) 此は一九三二年の Lehrerb. u. Quellenbenutzg. なる標題で廣告されたもの）。而も學問的な著作にも、時折まちがつた造形がある。即ち繪のやうな用語や言ひ廻しを以て、眞正な直觀性の缺けてゐるのに代へ得るし、また其によつて敘述に一抹の藝術味を與へると考へるのがそれである。實にこの場合でも、またいつでも、賦形が美しいといふのは、敘述すべき内容を目的にふさはしく再現する限りに於てのみのである。學問的な歴史敘述の目的は、歴史的認識を能ふ限り直觀的な形で報知することである。そのために用ゐる補助手段や技法は、この目的から寸毫も減損する所があつてはならないし、また何ものをも餘分に附加してはならない。客觀的把握、解釋及び批判に基づき、また敘述手續の補助手段によつてもまげられずに、研究結果を報知する敘述、此を客觀的敘述と稱する。敘述はかくしてわが史學の全職能と、極めて密接な内的關聯を保つてゐる。而してこの全職能をその多様な要求と共に、今や概觀し了るわけである。

〔本文終〕

追 補

第一章第二節へ附記

七、Adolf Hitler 指導の下に、一九三三年一月三十日以來ドイツの支配權を獲得した偉大な運動の結果として、ナチス（國民社會主義）の史觀は現はれた。本書では紙數が限られてゐるため、この史觀に就ても、その特徴ある要領を示し得るに止まること、本章に述べた他の諸傾向に就てと同様である。一層深い知識を得るためには、のちに記す文獻を見られたい。

この史觀では、歴史の根源たり最高價値たるものは人種であると主張する。人種とは、各民族の、『血と土地とに』結びついてゐる特性の謂である。このものから、神祕的な力で、人種特徴の本性のうちと與へられてゐる諸可能性が發展してゆく。この神祕的といふ意味で、アルフレット・ローゼンベルクは、のちに擧げるその著作を『第二十世紀の神話』と名づけてゐるのである。時を経る間には、多くの價値あるものが他から流れこむにしても、民族隆昌の根本條件であり、またいつでもさうであるものは、やはり人種的特性を貫徹し且つ此を純粹に保つことと、この意味での民族各員の意識とである。發展につれて加重してゆくこの意識たるや、己れの民族を最高價値とし、そのために生き且つ活動しようと思ふものである。この最高價値が一切の方面で決定的であり、従つてあらゆる信仰團體の教義の相違するに比すれば、一切の民族成員に共通な

宗教的義務たるものである。而して諸民族の發展が、或は成功、成熟し、或は昏迷、破滅してゐるのを、夫々根本の特性から究め説くのが史學の職能である。

此でこの歴史把握が、或る點では既述ヘルデルのそれと相觸れる所あることがわかるが、なほ彼の主要思想と殊に彼の後繼者ロツツェのそれも、ナチスの把握では排斥されてゐることを看過してはならない。諸人種、諸民族には様々の相違があるに拘らず、人生の一個共通の類型が發展するといふこと、またその際、人間實在の一個共通の理想への、全體として高まつてきた努力が認識され得るといふこと、此を排するわけである。ナチスの觀照は、たゞ夫々個々の民族に就てのみ右の事柄を認める。

ナチス文獻の一覽を供する書物は、W. Sagitz. Bg. d. Nationalsozialismus. Cottbus 1933
1935. E. Unger. Das Schr.-tum d. Nat.-sozialismus v. 1919 bis z. Jan. 1934. Forschungsber.
z. Wiss. d. Nat.-sozialismus. H. 1. 1975. 新聞としては、Völkischer Beobachter が、國民社會主義労働者黨（略稱 N. D. A. P.）の中央機關紙である。また叢書 Nat.-sozialist. Bibl. Hrsg. v. G. Feder は、個々の著述で種々の問題に關して説く、今までに四十冊位出つてゐて、その第一冊、右のフェーダーの Das Programm d. N. S. D. A. u. s. weltanschaul. Grundgedanken. 1933. 62S. は、第一一一一—一五版になつてゐる。なほ個々の論説のうち次のものを擧げておく。アドルフ・ヒットラーの基礎的な著作、Mein Kampf. 2 Bd. 1925, 27 今は内容を省略しないで一卷になつてゐてこの運動の由來を説いてゐる。なほ A. Rosenberg. Der Mythos d. 20. Jhts.:

e. Wertg d. seelisch-geistigen Gestaltenkämpfe unser. Zt. München 1933. 712S. Das Wesensgefüge d. Nat.-sozialismus: Grundlagen d. dt. Wiedergeburt. 7. Aufl. München 1933 ナチス史觀の特殊な補助學に關しては、本書第三章第五節を見られよ。

〔追補終〕

譯者附註

一、ゲオルク・シュナイダーのこの重寶な書誌は、その後一九二六年に第三版、一九三〇年には『全訂大增補第四版』をライプチヒから出した。この後版は第三版と比べて本文二割近くの増頁になつてゐる。傳記に關する部分は、第四版では第十六節(四六八―五三一頁)で、その内一般的即ち諸國人に互るものは四七三―八〇頁に、各國人傳記は四八一―五三一頁(ドイツ、四八一―九九頁、等々の國別)に記してある。卷末の正誤や附記のうち五四六―四八頁にも傳記關係の記事がある。シュナイダーのこの本は、最も優秀な一般書誌の一つで、史學研究者の參考書としても重要なものであらう。但しその重視する所は一般書誌にあり、各科の參考書を擧げるのが目的ではない。更に部門別書誌その他の參考書につき詳述する I. G. Mudge. *Guide to reference bks.* 5. ed. Chicago 1929 & J. Minto. *Reference bks.* Lond. 1929 をも利用されるがよい。前者にはマッヂらによる増補附録が三つあり、その最近のものは一九三四年に出、三三年までの參考書を包含してゐる。後者にも増補附録、三一年、が出てゐる。なほ一般叢傳に關しては P. M. Riches. *An analyt. bg. of universal collected biogr.* Lond. 1934 (未)なる書誌がある。

二、最新版は第五次、一九三五年度のもの、G. Lüdtke 編、ベルリン、ライプチヒ一九三五
年(未)。

三、世界諸國の諸種學校、學會、圖書館、文書館、博物館、動植物園など、苟くも教育、學藝に關係ある重要な施設は總て此を洩さず、夫々の創設年、長及び教授、職員、役員の職氏名、會員の資格や數、會費、藏書冊數、機關誌などの事項を記載してゐる。英國には、英語の話される諸地方に就て、同様の記事を載せる *Athens* (未) あり、また *The libraries, museums and art galleries year bk. 1897-9. ed., Gravesend; Lond. 1935* (未) も、英本國だけびなく、英帝國及び諸外國に就ても選擇的に記載し、フランスにも近頃、世界に互つて記述する *Ind. generalis* が出るやうになつたが、古くからあり、殊に近年増大したミネルヴァには及び難いやうである。例へばミネルヴァ第二十六年次、一九二三年刊は、書背の高さ一六糶の一六八九頁なるに對し、一九二五—二六年刊のインデックスは、一九糶の二二五八頁。ミネルヴァ第三十年次、一九三〇年刊、前記リュトケ編は、二一糶、三卷に増大、四三六二頁。三三—三四年には第三一年次、二卷、四五八五頁(未) が出てゐる。此が最新刊である。二九年からはミネルヴァ年鑑を補完するものとして、*Minerva-Handbr.* が同じ *De Gruyter, Berl. u. Lpz.* から出てゐる。その第一部は圖書館、第二部は文書館に就て年鑑の記事を補訂してゆく筈で、第一部では第一卷ドイツ、一九二九年、が既に一千頁を超える大冊であり、その後第二卷オーストリア、三二年(未)、第三卷スイス、三四年(未)、計三卷が刊行された。第二部でも獨逸及び北歐諸國を含む第一卷が三二年に出た(未)。

四、本文にあるフリードリヒの經濟地理の本は、割に短いもので、その後新版も出ないやうであるが、同教授の一層詳しい教本兼参考書は、*Allg. u. spezielle Wirtschaftsgeogr. 3. vollständig*

neubearb. Aufl. 2 Bd. 1926

ペシエルの地理學史には、改訂増補第二版がある、*hrsg. v. Sophus Ruge. München 1877*

スチーラーの地圖帖、本文記載のものは即ち百年版で、一九二一—二五年に互り、種々の製本にして公刊された。最近には、大戦によつてもドイツの地圖製作の諸技能は衰へてゐないことを世界に示すため、特に外國向の新版を出しつゝある、*Grand atlas de géogr. moderne. 10. éd. Ed. int. publ. par Hermann Haack, e. a. 114 feuilles, 263 cartes. Gotha 1934—: Justus Perthes*

グレーセリベネヂクトには、改訂、第三版がある。第二版とは標題が多少違ふが、中世以後のラテン語地名に特に注意してある旨記してある、ベルリン一九二二年刊。

スミスの地名辭典は二卷から成り、既に約十年前から第二卷は絶版であつた。併しその出版者、ロンドンの *John Murray* から出てゐる *A classical dictionary, [etc.]* にはこの地名辭典をも省略した形で入れてある。この『古典辭書』は一八四八年初版、九四年改訂第四版、一九二三年第二三刷、現在ではもつと増刷されてゐるであらう。

プッゲルの學校用歴史地圖帖は、一九二四年第四五版、三〇年には『地政學、經濟史、文化史に特に注意を拂つた』新版が、*Pehle* 及び *Silberborth* により編纂、公刊された。解説書もある。

五、一般及び部門別の書誌や参考書に就て説明した書物は、既にこの附註一に記しておいたが、なほ注意すべきは其だけではなす。まづ *Int. Jber. d. Bg. 1930—*、*hrsg. v. J. Vorstius. Lpz.*

にまた三種ある)に載る目録から、五年間の出版物を一纏めにした大部のものまで、細別すれば十種に近い。そのうち、一九三一年からドイツ・ビュヘライが現在の形で編纂することになった Dt. Nationalbg. は、Reihe A u. B の二種あり、前者は賣品たる書籍の目録、後者は稱號論文其他學校關係を始め諸種の非賣品に就てのものである。各別に購讀もできる。どちらも二十四の部門に分れ、且つ毎週、毎月、及び三ヶ月ごとに索引がつくから、通シアルファベットに編纂し直さないための不便も或る程度までは防げる。特に A は毎週、B は隔週に刊行されるから、書物の發行を早く知る便利がある。本文に出た Stich- u. Schlagwortkatal. と云ふのは、右述五ヶ年ごとのドイツ出版物總目錄附屬の書名及び件名索引のことである。この總目錄は、Dt Br.-verz., 1911/14 Lpz. 1916—22、今までに計一六卷一八冊出てゐる。原則として著者名から引くやうになつてゐるから、自然書名や件名からの索引が必要になるわけである。而して本文に右『カタログ』の刊年に就て、『一九二〇年刊行のものに一九一一年—一四年の文獻を載せてゐる』とあるのは、一回の目録が全部一度には出ないで、數卷が數年に互つて發行されるからである。例へば一九二六—三〇年の出版物を纏めた最近の分を見ても、Bd 12: A—G. [著者の姓の首字] 1931 Bd 13: H—O. 1932. Bd 14: P—Z. 1932. Bd 15: Register, A—K, 1932. Bd 16: L—Z. 1933 と云ふやうに三年に互り、書背の高さ二八種、各一五〇〇頁内外の大冊五卷を刊行してゐる。著者が本文にこの目録の索引を挙げられたのは、五年といふ相當の年數で纏めてあるため檢索が割合簡單にすむからであらう。前記週刊誌によつたりしたら非常に煩はしい仕事になる。週刊ほど頻繁な報告を必要とし

ない向のため、隔月發行の Das dt. B. (未)があつたが、此は抜萃目録で全出版物を網羅しない上に、少し前に廢刊になつた。また本文にあるヒンリクスの半年目録の續篇は、今でも年二回出てゐる。Halbj.-verz. d. im dt. B.-handel erschienenen Br, Zn u Idkarten. 1798— 此は半年づゝ纏まつてゐる便利であるが、出た本を知るのに若干遅くなる不便がある。

カイザー『圖書辭典』は一九一〇年分までで止んだ。

Literar. Zbl. f. Dtlid. 1851— は、やはりドイツ・ビュヘライの編纂にかゝり、右記書籍商組合から月二回發行される。一九三五年分は第八六年次に當る。前掲週刊書誌のやうに多數の部門別になつてゐて、單行本だけでなく雜誌論文の標題なども記載するが、彼の如くドイツ語で記した一切のものを採録するわけではなく、學問的に重要なものに限つてゐる。その索引を兼ねた年刊の部門別文獻報告は、Jberr d. Literar. Zbl. üb. d. wichtigst. wissenschaftl. Neuerscheinungen d. dt. Sprachgebietes, 1924—1925—(未)。ドイツ・ビュヘライはなほ、Jberr f. dt. Gesch. (Jg 1(1925)-, unter redaktioneller Mitarb. v. V. Loewe u. P. Sattler, hrsg. v. A. Brackmann u. F. Hartung. Lpz. 1927— 最近の分は第八年次一九三二年分で、右記後との兩氏編三四年に刊行された(何れも未見)。此は本文に出た Jberr d. dt. Gesch., 1918—24. hrsg. v. V. Loewe u. M. Stimming. Breslau 1920—26 (未)を繼ぐものである)のドイツ語資料の部分や、

後記 Int. Bg. d. Gesch.-wiss (Int. bg. of histor. sciences) のドイツ、オーストリアの資料の部分、其他の編纂にも従事してゐる。

英國の出版目録には、週刊の Publishers' circular and booksellers' record, [etc.] Lond. 1837-標題變更あり、業界記事、廣告など多し、一九三五年上半は第一四二巻、此を一年ごとに纏めた Engl. catal. of bks. for 1837-: a continuation of the "Lond." and "Brit." catal. [etc.] この目録の最近の分は、一九三四年が即ち第九八年次に當り、一九三五年に刊行された、四四五頁。更に五年ごとに纏めたものも、一八三五—六二年度分が一八六四年に出たのを最初とし、以後續刊してもとの『ロンドン』及び『ブリチッシュ』目録を包含し、一八〇一年から今日に至る目録を完成してゐる。實見し得たのは一九二六年刊の第十一巻で、一九二一年一月から二五年末までの出版書を含むもの、一七六一頁の厚冊。別に年四回發行の Whitaker's cumulative bk list も有名である。米國ではこの同じ出版者から、Publishers' weekly: the Amer. bk trade j. 1872—を出してゐる。一年を二巻に分つこと、また業界記事、廣告の多いことなども右記英國の週刊誌と同じである。vol. 126 (Jul.-Dec. 1934) ed. by F. G. Melcher, a. o. 年刊の Publishers' trade list annual. 1873—(未)も同所から出てゐる。併し英米を通じて殊に研究者に便利なのは、此ら業界機關誌を兼ねたものよりは、むしろ例へば Cumulative bk ind. N. Y. 1898—: H. W. Wilson による、vol. 38 (1935) 此は英語で書いた本は世界的に採録する方針を近來採り、収録範囲を廣くしてゐるから、其が辭書體で著者、書名、件名、どれからでも引けること、刊行が週刊の如く頻繁でないから業者ならぬ者には却て便利で、なほ且つ新刊を相當早く知り得る外に、數ヶ月乃至數年ごとに、通シアルファベットに纏められることなどの特徴がある上に、

更に一つの強味を増したわけである。一九二八年初現在米國出版圖書目録(絶版書を除く) United States catal. 4. ed. N. Y. 1928 も、右の『インデックス』に基づいて編纂した大部の一卷ものである。その後も『インデックス』の一年又は數年分を纏めたものが、右の『目録』の Supplement として出てゐる。その最近の分は、Cumulative bk ind, 1928—32. 1932 及び 37. annual cumulation, 1933—34. 1935 書物の紹介、批評を集録する月刊誌 Bk. r. digest. N. Y. 1905—vol. 31, 1935 も、『インデックス』と同じ發行者から出てゐて、半年及び一年ごとに通シアルファベットに改編される。

フランスには、まづ週刊の Bg. de la France: j. général et officiel de la librairie. Paris 1811—がある。その最近の分は、124. année (1935) Paris 1935: Cercle de la Librairie. & はり業界機關誌でもある。この雑誌の附録として、毎月 Les livres du mois, 毎年 Les livres de l'année が出る。後者の一九二二—三二年分は、部門別で五冊に纏めて發行された。月刊誌には Catal. mensuel de la librairie française. 1876—があり、一年ごとに索引をつけた由であるが、未見であるし數年前から發行中止になつた。今その代りに擧ぐべきは、發行者は違ふが、"Biblio", catal. français: bulletin bibliographique. Paris nov. 1933—である。此は後記イタリアの『ラ・スケーダ』と共に、右記米國の『キミュレーチヴ・インデックス』に範をとり、世界的に佛語の書物の刊行を記録するもので、従來の『ビブリアオグラフィ・ド・ラ・フランス』やその年刊目録が必ずしも使用に便利でないのに比し、輕捷の點で優る。この『ビブリアオ』一年分を纏めたものは、

一九三四年分既出。フランス出版目録數年分を一纏めにしたものは、通稱 Lorenz, 或は Lorenz-Champion として知られる *Catal. général de la librairie française, 1840/65-1867*。これは一八四〇—一八五年の二巻をオットー・ローレンツが、一八八六—一九一八年の二七巻を D. Jordell が編纂したによつて、ローレンツの名で知られてゐるわけである。この目録の需要が多いことは、その最初の pt. 1, tom. 1—4, 4 vol. が一九二二年に重刷されてゐるのでも察せられる。充分信頼できる目録であることは、その編者や発行書肆の名、また久しい歴史のあることから見ても大體肯かれるが、たゞ不便なのは発行が随分遅くなることで、此は次の例でも明らかであらう。E. Champion. *Catal. gén. de la libr. franç. [etc.] tom. 29 (1919—21) publié sous la direction de H. Stein. Paris 1927: Honoré Champion* なほ右記『ゴブリオグライ・ド・ラ・フランス』の發行所セールクル・ド・ラ・リブレリーから米國の『合衆國目録』に相當する次の總目録が出た。La librairie française: *catal. d. ouvrages en vente au 1er Janvier 1930. pt. 1: répertoire par auteurs, 2 tom. (1: A—K, 2: L—Z, suppl.) Paris 1931* 二巻計二五—三頁。一九三〇年初現在で、絶版書を含まないから、やはりローレンツも必要なわけである。右の著者から引く部の外に、標題から引く部もあるが、この方は未見。なほこの總目録の追録には『レ・リール・ド・ランネ』が充てられ、例へばこの年刊誌一九三三年刊の同年度分は第二追録になつてゐる。最後に、一五〇一年から一九三〇年に互り、フランス本國だけでなく植民地、諸外國で發行されたものをも含むフランス語書誌一切を網羅すべき目録が計畫され、一九三五年四、五月に第一冊

を出す豫定である。その標題は、*Répertoire de bg. française [: etc.] Paris, Letouzey & Ané*
La scheda cumulativa italiana : indize-dizionario . . . della produzione libraria in lingua italiana. diretta, compilata e pubblicata da T. W. Huntington. Anacapri 1932. Anno 3 (1934) 此は米人で米國の圖書館學校を出た編者が、イタリア語書籍の發行を速報するため、イタリアで季刊するもので、此を纏めて十二月號をその年の分の年報に作る。一九三四年分年報まで既出(年報未見)。最近伊國教育省の公認誌となつた。

雑誌の目録にも種々ある。概ね年刊で、主として業者のため必要な事柄を記載するのは、英の *Newspaper press directory: and advertisers' guide, [etc.] Lond. 1846-81. annual issue, 1926* 以後なほ續刊(雑誌に就ても記す、外國の分は簡略)。米の *Ayer's and son's American newspaper annual and directory. 1880-*(カナダ、キューバ等をも含む、未)。(C. F. Ulrich. *Periodicals directory, [etc.] N. Y. 1932* (外國をも含む、未)。(ドイツの *Sperlings Adressb. (H. O. Sparling 2 卷本) Stuttgart 1859* 創刊、最近の分は『ベルゼンフェライン編 *Sperlings Zn-u. Ztgs-Adre sb. d. dt. Presse [usw.]*。ライプチヒ一九三四年刊の第五九次一九三五年度版、ドイツの新聞雑誌だけでも九五二一種に關する記載あり、なほ外國の分をも含む、計七八四頁)。また年刊ではないが前記組合から出る *Adressb. d. fremdsprachig. Zn u. Ztgn. 1927-*(未)及び『ベルゼンブラット』が毎月一回掲載する創刊雑誌報告(未)。フランスの *Annuaire de la presse française et étrangère et du monde politique, 1880-*(未)。此らは上記の如く元來業

者用を主な目的とするものであるから、研究者にとつては寧ろ次に記すやうな目録類が一層重要な場合が多いかもしれない。

雑誌は學界最新の情勢を知るため缺くべからざるものであるが、その利用に就ては種々厄介な點がある。その一つは、大圖書館でも一つだけでは、増加しつつある諸部門の専門雑誌まで洩れなく蒐集する事は到底できない點である。大英博物館の版本目録舊版には *Periodical publications* といふ標目があり、別刷でも得られたが、内容は國際的且つ掲載誌數も多く、學會の機關誌ならば刊行の主體たる學會がどの何といふものであるか、また編輯者は誰か、その變更や標題の變化なども一々示され、殊に古くからある雑誌も所藏豐富なため、よく記入されてゐる。プロイセンの新目録にも『雑誌』の項ができるらしい。なほイギリスに就ては、*Tercentenary [1620—1919] handlist of Engl. and Welsh newspapers, magazines and rs. ed. by the Times. Lond. 1920* 米國及びカナダに就ては *A guide to the current periodicals and serials of the United States and Canada. 5. ed. comp. by H. O. Severance. Ann Arbor, Mich. 1931* がある。記入は何れも大英博物館のものほど詳しくなく、殊に前者は簡略である。もしも多數圖書館の逐次刊行物の合同目録ができるならば、或る雑誌を所藏してゐる館がすぐにわかるから、此によつて互に有無相通じて廣範圍の資料を利用し得ることにもなる。かういふ便利をめざして、諸國でこの種の目録や表を編纂する機運が動いてきて、殊に米國、カナダでは實際上斯る必要を感じることに深く、この企てが頗る廣汎熱心に行はれ、次の見事な成果を生じてゐる、*Union list of*

serials in libraries of the United States and Canada. N. Y. 1927 その Supplement は、同地三一年及び三三年の二冊出てをり、なほ第三冊が續く筈である。尤もこの本は『リスト』即ちチッキング・リストで目録ではない。或る雑誌がどの館に何巻からあるかなどを調べるための表であるから、各雑誌の編輯者が誰であつたか、いつ誰に代つたか、その他研究上時として相當重要になる事項が全部記入されてゐるわけではない。ドイツには、*Gesamt-Zn-Verz. 1914* (未) や *Gesamtverz. d. auslând. Zn, 1914—24, 1927* (略稱 GAZ, 未) 英には *World list of scientific periodicals published in the years 1900—33. 2. ed. Lond. 1934* (未) がある。

譯者 附註

雑誌類利用に際しての今一つの難點は、所載論文にどういふものがあるか、雑誌類が餘り多すぎて見當がつかないことで、また思ひがけない方面の雑誌に價値ある論文や記事の載ることもあり、言ひかへれば論文や記事の索引がないと、分り難い番地を調べるのに似た困難がある。この困難を和らげる爲に、幾つかの雑誌を毎號調べて合併索引を作ることが行はれる。史學の領域でも勿論此は實行されてゐるが、茲にはまづ一般的のものに就て記さう。本文に示してある『ドイツ雑誌文獻書誌』はその一例である。此も本文記載の程度では、どんなものか今一つはつきりしないが、實は次のやうな A—U 三部から成つてゐる。まづ標題は、*Int. Bg. d. Znlit. m. Einschluss v. Sammelwerken u. Ztgn. Abt. A, 1896—* hrsg. v. F. Dietrich. Gautzsch ([jetzt:] Mark-*kleberg bei Ipz.) 1897—* の A 部の最近刊出の分は、*Bd 72: Ergänzgsbd 15 (1876—78, [usw.]) 1935* 及び *Bd 73 (Juli-Dez. 1933), 1934* 更に *Bd 73a. Beil. Bd 21 (1934), 1935*

(何れも未見)。A部は年に二巻発行され、約五千種のドイツの雑誌類を索引する。その附録として毎月ドイツの新聞約百種からも重要な論文を索引する。Abt. B. 1911—は約二千種の外國雑誌に就て索引を作り、やはり年二巻出る。醫學關係論文の索引は、一九一四年以降中止された。また近年は數年分が纏めて刊行されたことも多く、さうなると殊に論文初出の時からこの書誌によつてその發表されたことが讀者に知れるまで、相當の年數が経過してしまふ憾みがある。一年二巻といふのが既に報告のあまり早くないことを示してゐるとも言へよう。このB部最近發行の分は Z. F. Bd. 9 (1933—34), 1934 (未)、更に Abt. C, 1900—1901 (未)は、外國書を含む新刊紹介批評にしてドイツの雑誌類約五千種と外國雑誌類約三千種とに載つたものを記録索引する。年に二巻出て、一方はドイツ雑誌掲載の分を、他は外國雑誌の分を採録する。此もやはり遅れる傾きがある。米國では前記『合衆國目錄』の出版者が、部門別にした多數雑誌の綜合索引を種々編纂發行してゐるが、史學關係だけを取扱つたものは出してゐない。一般的なものとしては、英米雑誌に就ての Readers' guide to periodical lit., 1900—を、學問的なものとしては Int. ind. to periodicals, [etc.], 1907—, 1916—, vol. 22, 1935 を出してゐる。後記プールの索引を繼ぐもので、記載の形式も、紙裝分冊(一九三五年五回)を一年乃至數年で纏め布裝とすることなども、『ブック・インデックス』に似る。この纏めた分は六巻あり、一九三四年六月までを索引してゐる。この索引は史學關係の論文をも相當含み、多くの外國雑誌を入れてある。なほ米國でウィルソン以外から出たものうち有名なものは、Poole's ind. to periodical lit., 1802—1907, 1891—1908 (英國雑誌を

含む)。英國にはその Library Association から出てゐる Subject ind. to periodicals, 1915—Lond. 1916—があり、英米を主とし若干外國の雑誌をも索引してゐる。

諸國の歴史關係の文獻を集録した重要な書誌類は本文に擧げてあるが、その後續々新しいものが出てゐる。此らのものに就ては専門雑誌に新刊の報告や批評が出るから、其に注意してゐるべきこと、他の専門に於けると同様である。近頃出た史學關係の書誌で、その範圍の一國、一時代、一部門などに限られないものを示せば、まづ最も廣汎に互るのが、Int. bg. of histor. sciences, year 1 (1926)—5(1930), 7(1932), 1930—34, 34 の六巻で、諸國(第七年度分では二十一國、ヴァチカン、ソヴェット・ロシアをも含むも我國や支那はない)學者の協力に成り、多くの部門を分つて夫々の一年間に現はれた文獻を記録してある。第七年度分では所載論文を索引した雑誌名とその略稱の表が八七頁に互り、その多い所では一頁に三十種以上を録してある。本文には單行本も多數記録し、人名索引を附す。一九三一年分は三三年分と同時に三五年中に出る豫定。次に A guide to histor. lit. ed. by W. H. Allison, a. o. N. Y. 1931 は一二五〇頁の厚冊、多數の史學參考書を示して説明を加ふ。中世に關しては、L. J. Paetow. A guide to the study of medieval hist. rev. ed. N. Y. 1931 本文六四三頁。更にラテン・アメリカに就つては A. C. Wilgus. The histories of Hispanic America, [etc.] Washington, D. C. 1933 : Pan American Union (Bibliograph. series.) (未)。フランスの史學關係雑誌に就つて Verz. französ. Zn auf d. Gebiete d. Gesch. u. ihr. Hilfswissn. hrsg. v. d. Dt. Geschäftsstelle z. Verbreitg gesch.-

註 附 者 譯

wissenschaftl. Lit. im Ausld, Prof. R. Holtzmann, Histor. Seminar d. Friedrich-Wilhelms-Univ. Berl. (Berl. 1931 未) が刊行された。なほ一九二九年からニューヨーク市で刊行されてゐた *Social science abstracts* は、多数の雑誌などの論文の主要紹介と索引とを兼ね、部門別になつてゐて甚だ便利なもので、史學關係の部分も相當廣汎であつたが、其だけに一九三二年限り僅か四卷で休刊になつたのは尙更残念である。その第五卷第一號は前四卷全部の總索引になつてゐる。此と標題の似た月刊雑誌で *Statistischer Reichsanzt* (ドイツ統計局) 編纂の *Bg. d. Sozialwissn* は、法律、政治、經濟などの方面の著書、論文の標題などを集録し、一々の論文の要旨紹介も批評もないし、また一般史學とは間接にしか關係のないものである。併し勿論例へば經濟史を研究する人々などにとつては、直接有用な目録であらう。

本文この項の終りの方に記してある目録類のうち最初のものは、創刊者の名をとつて『シュルトヘス』と冠稱又は略稱することも多い。この書物は一八六一年以來續いてゐる(未、シュナイダー及びマッヂによる)。一九三三年發行の三二年度のものは通計第七三卷に當る(未)。その次に記してある本にも A, B 兩部あつて、後者が『外國』である。英國にも有名な *Annual register: a r. of public events at home and abroad for the year 1758-1761* がある。最新刊は一九三四年度分、(n. s. vol. 176) 三五年刊 *M. Epstein* 編。また目録ではないが、地方別に重要事件の顛末を纏めてゐるのは *Survey of int. affairs, 1920/23* . ed. by E. J. Toynbee. Lond. 1925—で、大抵年刊になつてゐる。報道正確な信用ある新聞も大切な資料で、檢索の勞を

軽くするため索引の作られてゐるものもある。The Times. The official ind., 1906-1907. Lond. 1907-季刊。此方が、タイムズ社と關係なく出づる Palmer's ind. to the Times newspaper, 1790-1907. Lond. 1868-季刊(最近の分は Autumnal quarter—Oct. 1 to Dec. 31, 1934. 1935(未))よりも遙に詳しく、到れり盡せりの感がある。米國では季刊の The New York Times ind. vol. 1 (1913)-. N. Y. 1913—が標題の有名な新聞社から出つてゐる。

六、圖書館に就ての知識を纏めた近年の書物で最も大きいのは、*Handb. d. Bibl.-wiss. hrsg. v. F. Milkau* [1859-1934]. 1pz. 1931—であらう。その第一卷、一九三一年は、*Schr. u. B.* と題し、大冊本文八七六頁、古來の諸種の文字、書物の印刷、装幀、また書籍商、書誌等に關する諸家の講説を載せ、多数の挿圖を入れてゐる。第二卷、一九三三年(未)は圖書館經營を論じてゐるから、一般の人々には縁が遠い。第三卷には圖書館の歴史を載せる豫定である。H. B. van Hoensen and F. K. Walter. *Bg., practical, enumerative, histor.* N. Y. 1928 文字や書物の發達に觸れる所があり、諸方面の參考書も多數擧げてゐる。圖書館案内としては、世界的大圖書館以下、夫々利用者の便を計つて自館の案内を自から出してゐる所も多く、また私に作られたものもあるが、一館に限らず廣範圍に互るもの一例は *The uses of libraries*, ed. by E. A. Baker. new and rev. ed. Lond. 1930 だ。圖書館、文書館などの利用の手引となり、また讀書法なども

説いてある。英國關係の事項に詳しいのは當然であるが、他國の大圖書館若干にも論及してゐる。更に A. Esdaile. *National libraries of the world; their hist., administration and*

public services. Lond. 1934 は、大英博物館書記官であり學者である著者が、諸國の國立中央圖書館に就て説いたもので、其らの館の利用者を益する所少くないと思はれるが、或は一般の人々には専門的な書物と感ぜられるかもしれない。

七、英語での大部なものは、S. Halkett and J. Laing. Dictionary of anonymous and pseudonymous Engl. lit. new and enl. ed. by J. Kennedy, a. o. 7 vol. Edinburgh 1926—34

八、Z. d. Ver. f. Volkskde は一九二七年分までで刊行中止となり、二九年分以後 Z. f. Volkskde 新巻第一（また前誌第三九年次として）以下が出てゐる。

九、R. de synthèse histor. は一九三一年創刊の R. de synthèse の内に含まれることになつた。

十、Krit. Blr f. d. gesamten Sozialwissn は、第四巻以後その標題の初語 „Kritische“ を脱することになつた。

歴史とは何ぞや

十一、Z. f. Völkerpsychol. u. Soziol. は、第八巻（一九三二年分）から Sociologus と改題。

十二、Zbl. f. Anthropol. は第一七巻（一九一二年分）で終刊した。その第一—六巻は Zbl. f. Anthropol., ethnol. u. Urgesch.（本文一六一頁）、第七及び八巻は Int. Zbl. f. Anthropol. u. verwandte Wissn と稱した。

十三、右と標題の似てゐる Arch. f. Anthropol. は、Dt. Ges. f. Anthropol., Ethnol. u. Urgesch. の機關誌で、一八六六年創刊（本文一五九頁）。

十四、Polit.-Anthropolog. Revue は一九〇二年創刊、一五年に Revue を Monatschr. と改稱、二二年終刊。

十五、ブシャンの『民族誌』は二巻ではあるが三冊に分れ、第一巻（緒論、アフリカ、アメリカ）は本文にあるやうに『第三版』ではあるが、實は第二版で大増訂をしたので、其をそのまま重刷したもの、第二巻は第一篇（オセアニア、アジア）と第二篇（ヨーロッパとその縁邊地方）との二冊になり、何れも第二、三兩版を兼ねてゐる。かやうに『版』、edition, Auflage と、『刷』、impression などとは、元來異義なるべくして實用上混用されることも少くないから、目錄類を見る時、一般に實物を對比しないで書物を買ふ時、充分に注意する必要がある。尤も此は全般的の注意で、ブシャンの本が非常に重寶なものであることは少しも關係のないことである。

譯者附註

十六、ラッツェルの『人類地理學』は二篇から成る。第一篇の標題は本文にある傍題の通りで、彼自身の創刊にかゝる Bibl. geograph. Handbr. の最初の書物として一八八二年に出た。著者改訂第二版一八九九年。次の第三版一九〇九年、第四版二一年の兩版は實質的には第二版と同一である。第二篇、Die geograph. Verbreitg. d. Menschen は一八九一年初版。次で一九一二年と二二年とに夫々發行された第二、三兩版は、初版と本質的には變つてゐない。たゞ途中で右の『文庫』が初めよりも大形の新巻になつたため、兩篇とも頁數が變つてきたり、誤植を正したり、計數單位を統一したりしてあるだけである。なほ第四版では兩篇を合綴してはあるが、頁數は別々のまゝになつてゐる。

— -- Kulturgesch. 116
 — — Menschenkde 210
 — — Völkerpsychol. u.
 Soziol. 215—16, 248
 — — — Sprachwiss. ... 214
 Z. f. Volkskde 248
 Ztgswiss. 155

Zbl. f. Anthropol. ..21,—18, 248
 — — —, Ethnol. u.
 Urgesch. 161
 — — Bibl.wesen 169, 234
 Zentralstelle f. dt. Personen-
 u. Familiengesch. 98
 Ziegler, H. E. 218

追 録

(一一三頁註記へ) ウェーバーの世界史(一巻の分)は、F. T. Poland 編全新訂、二十五年紀念版を出した、ライプチヒ一九三五年刊。

(附註一へ) 米國傳記事典としては、Dictionary of Amer. biogr. がある。その最新刊の分は、vol. 15: Platt-Roberdeau, ed. by D. Malone. N. Y. 1935 (未)。フランスで新しいのは、ルソーゼイ・エ・アネから出る Dictionnaire de biogr. franç. dir. de J. Balteau. 1932—最近第十冊(第二巻のうちに入る)で Anduze まで進んだ、一九三五年刊。

(附註三へ) ミネルヴァの學校の部は、一九三六年早々に新版を出す豫定である。
 (附註五へ) アルリッチの雜誌案内は、一九三五年第二版を出した。

【附註終】

- Simon, Ernst 84
 Singer, K 57
 Smith, Wlm, Sir 104, 233
 Social science abstracts 245
 Socin, A 171, 172
 Sociologus 248
 Scennecken, F 94
 Sommer, Rob. 98
 Spangenberg, Hs 110
 Spann, Othmar 34, 38—39
 Spencer, Herbert 46
 Spengler, Oswald 55, 56—66, 110,
 113—14, 124, 125, 199, 220
 Sperling, H. O. 118, 241
 Spranger, Edu. 51, 125, 203, 210
 Stade, B 94
 Stadelmann, Rud. 39
 Statist. Reichsam, Berl. 246
 Stein, Hri 241
 —, Ldw. 215
 Steinhausen, Gg 115, 116
 Steinthal, Heymann 214
 Stephen, Leslie 99
 Stern, L. W. 131
 Stieler, Ad. 103, 233
 Stimming, M 237
 Stokvis, A. M. H. J. 99
 Strzygowsky, J 70
 Stückelberg, E. A. 146
 Subject ind. to periodicals .. 245
 Sueton(ius) → — Tranquil-

lus, C.

- Suetonius Tranquillus, Caius 153
 Susemihl, F. 29
 Sybel, Hch v. 117—18, 122
 Tacitus, Cornelius 24, 198
 Taine, H. A. 46
 Tell, Sage v. 175
 Thesaurus linguae latinae ... 91
 Thompson, Edw. Maunde,
 Sir 95
 Thukydides, v. Athen 23
 Thurnwald, R 215—16
 Thyssen, Joh. 78
 Tietze, Hs. 135, 156, 169, 171,
 172, 174, 176
 Tille, Armin 98, 106, 117
 Times 242, 247
 Tiro, Marcus Tullius 92
 Toynbee, E. J. 246
 Traub, Hs 155
 Troeltsch, Ernst 84
 Tylor, E. B. 161
 Ukert, F. A. 116
 Ulrich, C. F. 241, 250
 Unger, Erich 228
 Union list of serials 242—43
 U. S. catal. 239
 Unverzagt, W 105
 Vapereau, Gv 100
 Verbd d. dt. Vere f. Volksde 161
 — v. Museumsbeamten 170—71

- Ver. f. Volkskde 214, 248
 — z. Begründg .. e. Zent-
 ralstelle f. dt. Personen-
 u. Familiengesch. 98
 ergangenht u. Gegenwart .. 84
 Vico, Giambattista 110
 Völk. Beobachter 228
 Volk u. Rasse 217
 Voltaire, F. M. A. de 31
 Vorstius, Joris 233, 234
 Wach, Joachim 126
 Wachler, J. F. L. 29, 128
 Wachsmuth, Kurt 29, 152
 Wagner, Herm. 103
 Waitz, Gg .. 89, 118, 122, 185—86
 Walter, F. K. 247
 Wander, K. F. W. 148
 Warnefrid, Paul → Paulus
 Diaconus Cas.
 Wattenbach, Whm 29, 95,
 146, 152, 168, 175, 176
 Weber, Gg 28, 113, 250
 —, J. J. 96
 Wecken, Fch 98
 Wegele, F. X. 29
 Weinsberg, Sage v. d. treuen
 Frauen v. 142
 Weise, Osk. 95
 Weissenborn, E 98
 Weizsäcker, Jul. 190
 Weller, Emil 180

- , K 142
 Wer ist's? 100
 Werner, Hch 155
 Westermarck, Edvard
 Alexander 200
 Whitaker's cumulative bk
 list 238
 Who's who? 100
 Who's who in America 100
 Widmann, S 139
 Wiedemann, A 94
 Wiesner, Jul. v. 84
 Wilcken, Ulr. 97
 Wilgus, A. C. 245
 Wilmanns, E 226
 Windelband, Whm 113, 205
 Winter 112
 Wippermann, K. 118—19
 Wissowa, Gg 99
 Wolf, Gv .. 30, 155, 162, 165, 169
 Woltmann, Ldw. 42, 218
 Woods, F. A. 98
 World list of scientific peri-
 odicals 243
 Worringer, W 53, 63, 64
 Wrede, F 160
 Wundt, Whm 71, 216
 Young, Thomas 92
 Z. f. angewandte Psychol. .. 131
 — — Brfreunde 95
 — — Ethnol. 86

- Diaconus Cas.
 Paulus: Diaconus Casinensis 138
 Pauly, Aug. 99
 Peddie, R. A. 235
 Pehle, Max 233
 Peschel, Oskar103, 233
 Peters, U115—16
 Petersen, E 156
 Pflugk-Karstung, J. A. G. v. 96
 Pforzheimer, vierhundert,
 Sage v. d. 175
 Phonogramm-Arch.-Kommission
 sion 134
 Pichler, H34—35
 Pizzo, E 204
 Plenge, J 44
 Poland, F. Th. 250
 Polit.-Anthropolog. Monats-
 shr. 249
 — — — Revue 218, 249
 Polybios 23
 Polybios → Polybios
 Pommersche Blr f. d. Schule 83
 Poole's ind.244—45
 Poot, Linke53—54
 Po ta linguarum 90
 Porten, M. v. d. 42
 Potthast, Aug.166, 167, 168
 Prähistor. Z. 105
 Preuss. Akad. d. Wissn 95
 — Jbr 65

- Staatsbibl.234, 242
 Pseudo-Isidor. Dekretalen .. 174
 Publishers' circular 238
 — trade list annual 238
 — weekly 238
 Purlitz, F 119
 Putzger, F. W.104, 233
 Quesada, Ernesto 65
 Qui êtes-vous? 100
 Ranke, Joh.158, 173
 —, Leopold v. 48—49, 112,
 120, 122, 131, 205, 208
 Ratzel, Fch 103, 117,
 218, 249
 Reader's guide to periodical
 lit. 244
 Reclus, Élisée 103
 Reichsausschuss f. Volks-
 gesundheitsdienst 217
 Reichsztg d. dt. Erzieher 82
 Reimann 113
 Reincke, Gerhard 234
 Renesse, Th. de 100
 Répertoire de bg. française
 240—41
 Revue de synthèse 248
 — — — histor.71, 128,
 215, 248
 Riches, Ph. M. 231
 Richter, P. E. 148
 Richthofen, Ferdinand v. .. 102

- Rickert, Hch 51, 63, 71,
 203—04, 205
 Riess, Ldw.113, 215
 Rietsch, K. F. 96
 Riézler, Sigm. 175
 Ritter, Moriz 28
 Rocholl, R40, 71
 Röse, B 150
 Rohden, P. R. 113
 Roloff, E. M. 168
 —, G 118
 Roretz, K 70
 Rosenberg, Alfred ..227, 228—29
 Rosenberg, Arthur 29
 Rosvitha → Hrotsuit
 Roswitha → Hrotsuit
 Rothacker, Erich51, 71
 Rühl, Fz100—01
 Ruge, Sophus 231
 Sacken, Edu. v. 100
 Sagitz, Walter 228
 Sarwey 161
 Sattler, Paul 237
 Sawicki, Fz 70
 Schäfer, Dietrich 115
 Schäffle, A. E. Fr. 214,
 218, 221—22
 Scheda cumulativa239, 241
 Scheffer-Boichorst, Paul 186—87
 Scheidt, W 98
 Schelling, F. W. J. v. 48

- Schemann, L 217
 Schemm, Hs 82
 Schiller, J. C. F. v.49, 50
 Schliemann, Hch172—73
 Schlüter, Otto 102
 Schmeidler, Bernh. 205
 Schmidt, H 84
 Schmidt-Rohr, Gg 220
 Schneidemühl, G210—11
 Schneider, Gg99, 117, 169,
 182, 231, 234
 —, Herm. 70
 Schrader, Otto 159
 Schreiber, Gg 215
 Schubart, Whm95, 97
 Schuchhardt, C172, 173
 Schulthess, H118, 246
 Schultz, B. K. 217
 Schultze, V 146
 Schwalbe, G 158
 Schwarz, Herm. 34
 Scriptorum rerum Meroving-
 icarum, MG 146
 Seeck, Otto 41
 Seignobos, Ch128, 129, 163
 Severance, H. O. 242
 Sextos Julios Africanos →
 Julios Africanos, S.
 Sievers, Edu. 190
 Silberborth, Hs 233
 Simmel, Gg 71, 215

- Constantinus
 Kopp, U. F. 92
 Krabbo, H. 94
 Kraft, Victor125—26
 Krates v. Mallos 140
 Kretschmer, Konrad103, 104
 Krit. Blr f. d. gesamten
 Sozialwissn71, 215, 248
 Krumbacher, Karl29, 190
 Krusch, B. 146
 Küntzel, Gg 30
 Kürschner, Jos. 100
 Ladendorf, Otto 147
 Lafargue, Paul 42
 Laing, John 248
 Lamprecht, Karl47—48,
 73, 110, 115, 116, 215
 Langlois, Ch. V.29, 117,
 128, 129, 166, 167
 Larenz, K. 44
 Larned, J. N. 118
 Lassen, Ch 29
 Lasson, Ad. 81
 Laurent, F 71
 Lautabteilg, Staatsbibl., Berl.
 134
 Lauxmann, R 142
 Lay, W. A. 131
 Layard, Austen Hry, Sir 92
 Lazarus, Moritz 214
 Lee, Sidney, Sir 99

- Leisegang, H 71
 Leist, F 96
 Leo, F 154
 Lersch, Ch. B. M. 100
 Lessing, Theodor55—56, 57,
 124, 146
 Librairie française 240
 Libraries, museums year bk 232
 Library Association, Lond. 245
 — of Congress, Washing-
 ton, D. C. 235
 Ligurinus 176
 Limesbl. 162
 Lindner, Theod. 71
 Literar. Zbl. f. Dtld ... 117, 237
 Litt, Theod. 215
 Littré, Émil 46
 Livres de l'année 239, 240
 — du mois 239
 Löher, Fz v. 169
 Loewe, Vikt.118, 169, 237
 Logos 65
 Lohmeyer, K 96
 Lond. Catal 238
 — Times → Times
 Lorenz, Otto 240
 —, Ottokar29, 97—98,
 99, 110, 204, 205
 Lotze, Herm.33, 66, 68,
 69—70, 222, 228
 Lüdtké, Gerhard 231

- Mabillon, Jean91, 95
 Malone, D 250
 Maritain 39
 Martens, W 104
 Marx, Karl 42
 Mayer, Alois 39
 Mehlis, Gg 71
 Mehring, Fz 44
 Meister, Aloys70—71
 Melcher, Fr. G. 238
 Meyers Lexikon99, 118
 Meyer, John145, 214
 MG → Monumenta German.
 Hist.
 Milkau, Fritz 247
 Mill, J. S. 46
 Miller, Konrad 156
 Minerva100, 232, 250
 — Handbr 232
 Minto, John 231
 Mirbt, K(C)arl 155
 Misch, Gg. 154
 Mitt(h)eis, Ldw. 97
 Mogk, E 161
 Mommsen, Theodor95, 144,
 161, 164, 169
 Monod, M. G. 118
 Montfaucon, Bernard de 92
 Monumenta Germaniae Historica
92, 122, 146, 152, 165,
 167, 183, 185—86, 187, 190

- Moog, W35, 71
 Morgan, L. H.199—200
 Mudge, I. G.231, 234
 Müller, Iwan v.29, 90, 95
 Museumskde 169
 Nagl, J. W.104, 160
 Nat.-sozial. Bibl. 228
 N. Y. Times 247
 Newspaper press directory .. 241
 Nibelungen, Sage v. d. 21
 Niebuhr, B. Gg122, 131, 144
 Nietzsche, F. W.57, 83
 Norden, Edu. 187, 197
 Nouvelle biogr. universelle .. 99
 Novicon, J 42
 Oberhammer, Eugen 103
 Oesterley, Herm 165
 Österreich. Freiheitsprivileg-
 ien, d. grösseren 174
 Ohlenschlager 139
 Oncken, Whm113, 116
 Oppolzer, Th. v. 180
 Ostwald, W 42
 Otto Frisingensis → Otto v.
 Freising
 Otto v. Freising137—38
 Pactow, L. J. 245
 Palmer's ind. 247
 Paul, Herm.90, 145
 Paulinus 173
 Paulus Casinensis → —

- Harnack, Adolf v., Festschr.
 f. 134
 Hartmann, L. M. 113
 Hartung, Fritz 237
 Hartwig, O 42
 Hauptmann, Fel. 100
 Hausenstein, W 52—53
 Heeren, A. F. L. 116
 Hefeke, C. J. v. 173
 Hegel, G. W. F. 42, 48,
 49—50, 51, 70, 110, 127, 214
 Hehn, Viktor 159—60
 Heide, W 155
 Heinrich IV, Biograph d. .. 153
 — —, Gedicht üb. d. Sach-
 senkrieg d. 176
 Hellwald, Fch v. 41
 Helmolt, H. F. 106, 113, 139
 Herder, J. G. v. 31—32, 33,
 66, 67—70, 127, 228
 Herodot → Herodotos
 Herodotos v. Halikarnassos
 22—23
 Herodotus → Herodotos
 Herre, Paul 128, 166
 Hertslet, W. L. 139, 147
 Hertz, Fr 217
 Hertzberg, G 28, 104
 Hervé, J. A. 52
 Hettler, August 169
 Heussi, Karl 83

- Heyne, C. G. 140
 —, Mor. 91
 Hieronymus, St. 107, 151
 Hinrichs, J. C. 118, 237
 Hist. de litt. de la France .. 29
 Histor. Vjschr. 117, 167
 — Z. 118
 — Seminar d. Friedrich-
 Wilhelms-Univ. 246
 Hitler, Adolf 227, 228
 Hönger, A 22
 Hoernes, Mor. 158, 159
 Hoesen, H. B. van 247
 Hoffmann, Arthur 99
 Hofmann, Albert v. 101
 Hofmeister, Adolf 98
 Holtzmann, Rob. 143, 246
 Holzmann, Mich. 182
 Homberger, O 169
 Homer 21, 172, 172—73
 Honegger, J. J. 221
 Hoops, Johs 159
 Hrosvitha → Hrotsuit
 Hrotsuit 176
 Hrotsvitha → Hrotsuit
 Hübner, Johs 122
 Humanisten 176
 Humboldt, Whm v. 68—69
 Huntington, T. W. 241
 Husserl, Edmund 52
 Ideler, Ldw. 100

- Index generalis 232
 Inst f. österreich. Gesch.-
 forschg 96
 Int. Ausschuss d. histor.
 Wissn 102
 — Bg. d. B.- u. Bibl.wesen 244
 — — — Gesch.wissn →
 — bg. of histor. sci.
 — bg. of histor. sciences
 237, 245
 — Cbl. f. Anthropol. u.
 verwandte Wissn 248
 — ind. to periodicals 244
 — Inst f. geistige Zusam-
 menarbeit 234
 Isidor(e) → Isidorus v.
 Sevilla
 Isidorus Hispalensis → —
 v. Sevilla
 Isidorus v. Sevilla 107
 Jacobi 161
 Jb. d. Charakterol. 210
 Jbr d. dt. Gesch. 152
 Jbere d. dt. Gesch. 30
 — — Gesch.wiss. 30, 117
 — — Literar. Zbl. 237
 Jensen, Hs 94
 Jodl, Fch 115, 221
 Jordanes 138
 Jordell, D 240
 Julios Africanos, Sextos 107

- Kampers, Fz 142
 Kant, Immanuel 48—50
 Katscher, L. 200
 Kaufmann, Fritz 71, 204, 213
 Kaulen, Fr. 94
 Kautsky, Karl 42, 44, 199
 Kautzsch E 171, 172
 Kawerau, S 115
 Kayser, Ch. G. 118, 237
 Keller, Christoph → Cellarius
 Kennedy, James 248
 Kenyon, Frederick G., Sir .. 97
 Keyser, Erich 103, 104,
 110—11, 128, 129,
 163, 169, 214, 222
 Keyserling, H., Graf 54, 57
 Kiepert, Hch 104
 Kircheisen, F. M. 154
 Kistiakowski, Th. 215
 Klages, Ldw. 67, 211
 Klar, Max 103
 Kleiber, Th. 154
 Klewitz, W 96
 Klussmann, Rud. 141
 Kneisel, B 103, 104
 Knippen, R 214
 Königinhofer Handschr. 175
 Kötzschke, Rud. 104
 Kogon, E. M. 39
 Kommission d. Landesgesch. 102
 Konstantin I d. Grosse →

- Dufresne → Du Cange
 Dunkmann, K 39
 Ebers, G 94
 Ebert, Max 159
 Eccardus Uraugiensis →
 Eckhardt
 Eckhardt v. Aura 34
 Eggehardus Uraugiensis →
 Eckhardt
 Eginhard → Einhard
 Egli, J. J.104, 160
 Eibl, Hs 32
 Eichhoff, W 199
 Einhard147, 153
 Einhart → Einhard
 Eisler, Rich. 70
 —, Rud. 221
 Ekkehardus Uraugiensis →
 Eckhardt
 Engels, Fch42, 44, 200
 Engl. catal. of bks 238
 Epstein, M 246
 Ersch, J. S. 28
 Erslev, Krist.128, 129
 Esdaile, Arundell247—48
 Euhemeros v. Messina 140
 Europä. Gesch.kalender 118, 246
 Eusebios Panphilou → Euse-
 bios v. Caesarea
 Eusebios v. Caesarea107, 151
 Exiguus → Dionysius Exiguus
 Favre, L 91
 Feder, Alfr.123—24, 128
 129, 169, 171, 176, 186, 194,
 195, 196, 200, 207
 Feder, G 228
 Feist, Sigmund 160
 Fernkorn, C. M. 34
 Fichte, I. H. v. 48
 Ficker, Jul. v.174, 198
 Fischer, E 158
 Fling, F. M.128, 176, 180,
 181, 187, 195, 204, 224
 Flint, Robert 71
 Fontenelle, Bernard le Bou-
 vier de 123
 Forcellini, Egidio90—91
 Forschungsber. z. Wiss. d. Nat.-
 sozialismus 228
 Frels, W 117
 Freud, Sigmund 221
 Friedell, Egon .. 56, 109—10, 221
 Friedrich I Barbarossa, Epos
 üb. d. Kriege v. → Liguri-
 nus
 Friedrich, Ernst.102, 232—33
 Fries, W 117
 Frobenius, Leo .. 54, 57, 63, 110
 Fueter, Edu.29—30
 Fulda, Privilegien d. Abtei
 174
 Gaebler, Ed. 104

- Gardthausen, Vikt. 169
 GAZ → Gesamtverz. 1. aus-
 länd. Zn
 Geiger, P. E. 20
 Georg, K 117
 Georgius Florentinus →
 Gregor v. Tours
 Gercke, Alfr. 178, 187, 197
 Gesamtver. d. dt. Gesch.-u
 Altertumsvere 102
 Gesamtverz. d. ausländ. Zn 243
 Gesamt-Zn-Verz. 243
 Gesch.schreiber d. dt. Vorzt 167
 Ges. f. ältere dt. Gesch.kde 168
 — — Anthropol., Ethnol.
 u. Urgesch. → Dt. Ges. ...
 Giesebrecht, Whm 116, 122, 205
 Giry, Arth. 96
 Glagau, Hs 153
 Godet, Marcel 234
 Goedeke, K 138
 Göller, E 110
 Görresges.37, 39, 118
 Goetz, Whm103, 113, 116
 Goldfriedrich, J 215
 Goldscheid, R 42
 Gothaisch. genealog. Hof-
 kalender 99
 Gothein, Eberhard 115
 Gradenwitz, O 97
 Graesel, Arnim 169
 Graesse, J. G. Th.104, 233
 Grande encyclopédie 182
 Grazer, R 200
 Gregor v. Tours 138
 Gregorius VII d. Grosse 212
 Grimm, J. L. K.91, 159
 —, W. K. 91
 Gröber, Gv 90
 Gross, Charles 118
 —, Hs 171
 Grote, Herm. 99
 Grotfend, Herm.92, 101
 Grottenfelt, Arvid 205
 Gruber, J. G. 28
 Grundriss d. german. Philol.
 148, 160
 Grupp, Gg 38
 Gubernatis, A. de99—100
 Günther, Hs F. K.216, 217
 —, Siegmund 103
 Guthe, Herm. 103
 Gutwasser, K 113
 Haack, Herm.103, 104, 233
 Haering, Herm.89, 118
 —, Th. L. 63
 Halkett, Samuel 248
 Hammacher, Emil 44
 Hampe, Karl 30
 Handb. d. klass. Altertums-
 wiss. 29, 103, 167,
 169, 171, 174

176, 182, 190, 198, 203, 212,
213, 215, 224

Bebel, A42, 200

Becher, E125, 203-04, 206

Becker, Minna 211

Beda → Bede

Bede the Venerable 107

Behn, F 159

Beiträge z. Psychol. d. Aus-
sage 131

Beloch, K. J.48, 215

Below, Gg v. 30, 44, 50, 115, 116

Benedict, F104, 233

Benfey, Th90, 142

Bengel, J 115

Beratgsstelle f. biolog. Fami-
lienforschg 98

Berdjajew, Nikolaus 39

Berger, Ph 94

Bergson, H. L.51-52

Berliner Ges. f. Anthropol.,
Ethnol. u. Urgesch. 86

Bernheim, Ernst 3, 9, 19,
37, 67, 70, 84, 110, 115, 116,
117, 128, 143, 165, 166, 168,
172, 174, 175, 176, 186, 202,
205, 206, 212, 215

Berr, Hri71, 128

Beyer, W48, 215

Biblio239-40

Bg. de la France239, 240

Bibl. nationale, Paris 235

Biograph. Blr 154

Birt, Th 95

Blr f. d. gesamten Sozial-
wissn 248

Boeckh, Ph. A. 141

Böhm, Fz204, 214

Börsenver. d. Dt. Buchhänd-
ler 117, 118, 235-37, 241

Bohatta, Hs 182

Bolland, Joh. 146

Bk r. digest 239

Bopp, Fz 159

Bourdeau, Hri 47

Bower, Archibald 205

Brackmann, Albert 237

Brandenburg, Er. 44

Brandt, Ebba 128

Braun, Otto70-71

Bremer, O 160

Bremischer Lehrerver. 226

Bresslau, Harry96, 168

Breysig, Kurt112, 214

Brinkmann, K(C)arl 186

British catal. 238

British Museum234, 235, 242

Brockhaus' Lexikon99, 118

B. d. Daniels 107

Buchner, Max 171

Büchmann, Gg 147

Buckle, H. B. 46-47, 75, 216-20

Burger, F 52

Buschan, Gg218, 249

Cappelli, Adriano 95

Catal. mensuel de la librairie
franç. 239

Cellarius, Christoph 108

Cbl. f. Anthropol., ethnol.
u. Urgesch. 248

Champion, Édouard 240

Chevalier, Ulysse 166

Cid, poema del21-22

Comte, I. A. 44-46, 47, 110,
127, 214

Constantinus I, d. Schenk d. 174

Corradini90-91

Crates → Krates

Creuzer, Fr 140

Croce, Benedetto 204

Cumulative bk ind. 238-39, 244

Cunow, H. W. C. 44

Curschmann, F102-03

Dahlmann, F. C.89, 118

Darsy, M. D. 99

Darwin, Ch. R.41-42, 43

Degener 100

D'Ester, Karl 155

Delbrück, Berth. 159

Delehaye, Hippolyte 146

Dt. Altschr.bund 94

— anthropolog. Ges. → —
Ges. f. Anthropol., ...

— Bücherei235-37

— Geschäftsstelle z. Ver-
breitg gesch.wissenschaftl.
Lit.245-46

— Gesch.blr. 117

— Gesch.kalender.118-19

— Ges. f. Anthropol., Eth-
nol. u. Urgesch. 159, 248

— grapholog. Studienges ... 211

— Inst f. Ztgskde 155

— Ver. f. B.wesen u. Schr-
tum 95

— Z. f. Gesch.wiss. 117

Devrient, Ernst 93, 99

Dezobry, L. Ch. 99

Diaconus → Paulus Diaconus
Cas.

Diet. de biogr. franç. 250

— of Amer. biogr. 250

Diehl, Ernst 150

Diesel, Eugen. 220

Dietrich, Felix118, 243-44

Dilthey, Whm 51

Dionysius Exiguus 111

Dittmer, G 220

Dörpfeld, Whm 173

Dove, Alfred110, 112

Dries, h, Hs 34, 126

Droysen, J. G.104, 122, 128

Du Cange, Ch. du Fresne,
Sieur 91

讀書子に寄す

岩波茂雄

——岩波文庫發刊に際して——

眞理は萬人によつて求められることを自ら欲し、藝術は萬人によつて愛されることを自ら望む。嘗ては民を愚昧ならしめるために學藝が最も狭き堂宇に閉鎖されたことがあつた。今や知識と美とを特權階級の獨占より奪ひ返すことはつねに進取的なる民衆の切實なる要求である。岩波文庫は此要求に應じそれに勵まされて生まれた。それは生命ある不朽の書を少數者の書齋と研究室とより解放して街頭に隈なく立たしめ民衆に伍せしめるであらう。近時大量生産豫約出版の流行を見る。その廣告宣傳の狂態は姑く措くも後代に貽すと誇稱する全集が其編輯に萬全の用意をなしたるか。千古の典籍の翻譯企圖に敬虔の態度を缺かざりしか。更に分賣を許さず讀者を繫縛して數十冊を強ふるが如き、果して其揚言する學藝解放の所以なりや。吾人は天下の名士の聲に和して之を推擧するに躊躇するものである。この秋にあつて岩波書店は自己の責務の愈重大なるを思ひ、従來の方針の徹底を期するため既に十數年以前より志して來た計畫を慎重審議この際斷然實行することにした。吾人は範をかのレクラム文庫にとり、古今東西に互つて文藝哲學社會科學自然科學等種類の如何を問はず、苟も萬人の必讀すべき眞に古典的價値ある書を極めて簡易なる形式に於て逐次刊行し、あらゆる人間に須要なる生活向上の資料、生活批判の原理を提供せんと欲する。この文庫は豫約出版の方法を排したるが故に、讀者は自己の欲する時に自己の欲する書を各個に自由に選擇することが出来る。携帶に便にして價格の低きを最主とするが故に、外觀を顧みざるも内容に至つては嚴選最も力を盡し従來の岩波出版物の特色を益發揮せしめようとする。この計畫たるや世間の一時の投機的なるものと異り、永遠の事業として吾人は微力を傾倒しあらゆる犠牲を忍んで今後永久に繼續發展せしめ、もつて文庫の使命を遺憾なく果さしめることを期する。藝術を愛し知識を求むる士の自ら進んで此舉に参加し、希望と忠言とを寄せられることは吾人の熱望するところである。その性質上經濟的には最も困難多き此事業に敢て當らんとする吾人の志を諒として其達成のため世の讀書子とのらるはしき共同を期待する。

昭和二年七月



波岩